

城之越遺跡
鷺ヶ尾古墳群
発掘調査報告

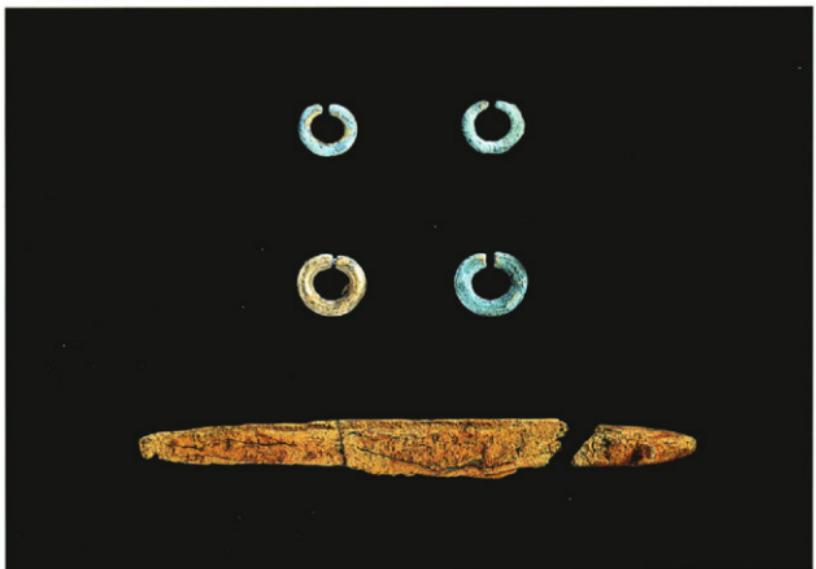
— 三重県上野市比土・摺見 —

1997・3

三重県埋蔵文化財センター



鷺ヶ尾2号墳石室跡（南西から）



鷺ヶ尾2号墳出土金属製品

例　　言

1 本書は以下の発掘調査報告書である。

城之越遺跡 三重県 上野市 比土字城之越
鷺ヶ尾古墳群 三重県 上野市 摺見字鷺ヶ尾

2 本書は平成8年度農業基盤整備事業にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書の第10分冊である。

3 調査にかかる費用は、県農林水産部の全額負担による。

4 調査体制は下記によった。

調査主体 三重県教育委員会
調査担当 三重県埋蔵文化財センター
調査協力 三重県農林水産部農村振興課、上野農林事務所
上野市教育委員会、地元各位

5 調査地、調査面積、期間、担当者は下記のとおりである。

城之越遺跡 600m² 平成8年8月19日 主事 木野本和之
～10月11日 技師 高田恵理子
鷺ヶ尾古墳群 1,000m² 平成8年7月22日 主事 筒井 正明
～10月31日 主事 坂倉 一光

6 本書作成のため整理作業および、遺構・遺物の実測、トレースは調査担当者の他に管理指導課が行い、写真、執筆は担当者が行った。

7 本書の執筆分担は目次および文末に示した。

8 図面における方位は真北を用いた。なお当地域の磁針方位は西偏6°20'（平成2年）である。

9 本書で使用した事業計画図面は農林水産部の提供による。

10 本書で用いた遺構表示略記号は下記による。

S K = 土坑 S Z = 不明遺構

11 本書で報告した各遺跡の記録類および出土遺物については三重県埋蔵文化財センターで保管している。

12 スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。

各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

目 次

I 城之越遺跡 (木野本和之)	1
1 はじめに	1
2 調査の成果	2
3 結語	9
II 鶩ヶ尾古墳群 (筒井 正明)	13
1 位置と歴史的環境	13
2 遺構	16
3 遺物	25
4 結語	27

図版目次

城之越遺跡

図版1 調査前風景、表土掘削風景、作業風景、SK2 実測風景、SZ1 遺物出土状況	11
10	12

鶩ヶ尾古墳群

図版4 1号墳調査前、2号墳調査前	32
図版5 1号墳調査後	33
図版6 2号墳調査後	34
図版7 2号墳石室跡	35
図版8 1号墳・2号墳、3号墳現況	36
図版9 1号墳・2号墳周溝、1号墳・2号墳周溝	
溝土層、1号墳遺物出土状況、2号墳石室跡	
検出状況、体験発掘、調査区より比自岐盆地	
を望む	37
図版10 出出土器	38
図版11 出出土器、出土石器、出土土器	39

挿図目次

城之越遺跡

第1図 遺跡位置図	2
第2図 遺跡周辺地形図	3
第3図 調査区位置図	4
第4図 土層断面図	4
5	7～8

鶩ヶ尾古墳群

第9図 遺跡位置図	13
第10図 遺跡地形図	15
第11図 調査区位置図	17
第12図 1号墳・2号墳調査前測量図	18
第13図 1号墳・2号墳土層断面図	19～20
第14図 1号墳・2号墳調査後測量図	21
第15図 3号墳現況測量図	22
第5図 遺構平面図	
第6図 土坑SK2 遺物出土状況	5
第7図 出土遺物実測図	6
第8図 城之越遺跡遺構配置図	7～8
第16図 2号墳石室跡実測図	23～24
第17図 出土遺物実測図 [1号墳出土土器]	26
第18図 出土遺物実測図 [2号墳出土土器]	26
第19図 出土遺物実測図 [2号墳出土金属製品]	26
第20図 出土遺物実測図 [その他]	27
第21図 1号墳遺物出土状況図	28

表 目 次

城之越遺跡

第1表 出土遺物観察表	6
-------------	---

鶩ヶ尾古墳群

第2表 出土遺物観察表	31
-------------	----

I 上野市比土 城之越遺跡

1 はじめに

(1) 位置と環境

城之越遺跡は、上野市比土に所在する。上野市は三重県の北西部に位置し、伊賀盆地の中心部を占める。この盆地は、古琵琶湖の陸化によって形成されたもので、独立丘陵や低丘陵等によってさらに幾つかの小盆地に分割されている。城之越遺跡の所在する比土地区も、隣接する古都地区とともに小盆地を形成している。布引山地に源を発する木津川は、上野市最南部のこの盆地でその流れの向きを大きく北に変え、伊賀盆地を縦断していく。城之越遺跡は、上野市比土の木津川右岸の丘陵麓の、標高169m～170mの水田部分である。遺跡は、遺物散布状況からA・B・Cの3地区に分かれており、今回の調査対象は、A・C地区である。

古墳時代の比土地区周辺では、城之越遺跡をはじめ高賀遺跡①・高瀬遺跡②などで人々の活発な活動が認められる。また、周囲の丘陵地帯には美旗古墳群③～⑦をはじめ、県内でも有数の古墳が築造されており、比土周辺が伊賀における拠点の地域であったことを物語る。その他にも、周辺では多くの遺跡が確認されており、本来ならば時代順に歴史的環境を述べるべきであるが、詳細については平成3年度報告書を参照されたい。

(2) 調査に至る契機と経過

a 調査に至る契機

今回の調査地は、県史跡指定地からは約100m東の丘陵に隣接する指定地内では最も微高地にあたる部分（城之越遺跡A地区）と、北川を挟んで南側の部分（城之越遺跡C地区）である。調査区微高地部分のすぐ西隣では、平成6年の上野市教育委員会による調査によってV字状の断面をもつ大溝が確認されている。

現況は、ほ場整備後につくられた農道である。平成8年度農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業

（上野南部2期地区）に伴いその部分が工事されるため、本調査が行われることとなった。

調査区は農道部分で、南北約300m・幅約4mと細長い。現在は、農作業用道路・平成9年度開館予定の上野市ガイダンス施設進入路として利用されており、調査にあたりこの道を全面閉鎖することは困難であった。そこで便宜上調査区を3分割し、通路を確保しながらの調査を実施することとした。しかし、この道路には水管が既設されており、場所によつては重機のバケット幅しか調査できない部分もあった。さらに、秋雨前線の停滞による長雨にも見舞われ、悪条件のなかでの調査が続いた。

調査は平成8年8月20日に開始し、同年10月11日に終了。最終的な調査面積は600m²であった。

b 調査日誌抄

- 8月20日 表土掘削開始。
8月21日 遺構検出。山側からの湧水多い。
8月23日 遺構確認できず。遺物も少ない。
8月28日 降雨による側壁崩落進む。平板測量。
8月29日 連日の雨で、調査区水没。終日排水。
9月11日 調査区北半部掘削開始。落ち込みから、
 遺物片まとまって出土。遺構を確認。
9月19日 落ち込み部分、重機で再掘削。土坑を確
 認。台付甕が出土。
9月27日 土坑を掘削。遺物がまとめて出土。
10月1日 調査区北半部掘削終了。調査区写真。
10月3日 座標の振り込み作業。
10月7日 北川以南の表土掘削開始。盛土が厚い。
 遺構も確認できず。調査中止。
10月11日 撤収完了。



第1図 遺跡位置図 1:50,000 (国土地理院 1:25,000「阿保」「伊勢路」から)

主要遺跡（弥生・古墳時代を中心とする。丘陵部無印枠は主要群集墳。）

- | | | |
|-----------------|------------|----------------|
| 1. 城之越遺跡 | 10. 鷲ヶ尾古墳群 | 19. 稲田遺跡 |
| 2. 柏尾銅鐸出土地 | 11. 中出向遺跡 | 20. 高瀬遺跡 |
| 3. 比土遺跡・比土銅鐸出土地 | 12. 中鳥遺跡 | 21. 宮内庁所管急速別命墓 |
| 4. 石山古墳 | 13. 浮田遺跡 | 22. 近代古墳 |
| 5. 王塚古墳 | 14. 高質遺跡 | 23. 横ヶ森遺跡 |
| 6. 才良山1号墳 | 15. 大師山古墳群 | 24. 殿塚古墳 |
| 7. 観音寺山古墳 | 16. 南山古墳群 | 25. 女良塚古墳 |
| 8. 才良遺跡・才良廃寺 | 17. 城之越古墳群 | 26. 畏沙門塚古墳 |
| 9. 馬場西遺跡 | 18. 北川遺跡 | 27. 馬塚古墳 |

2 調査の成果

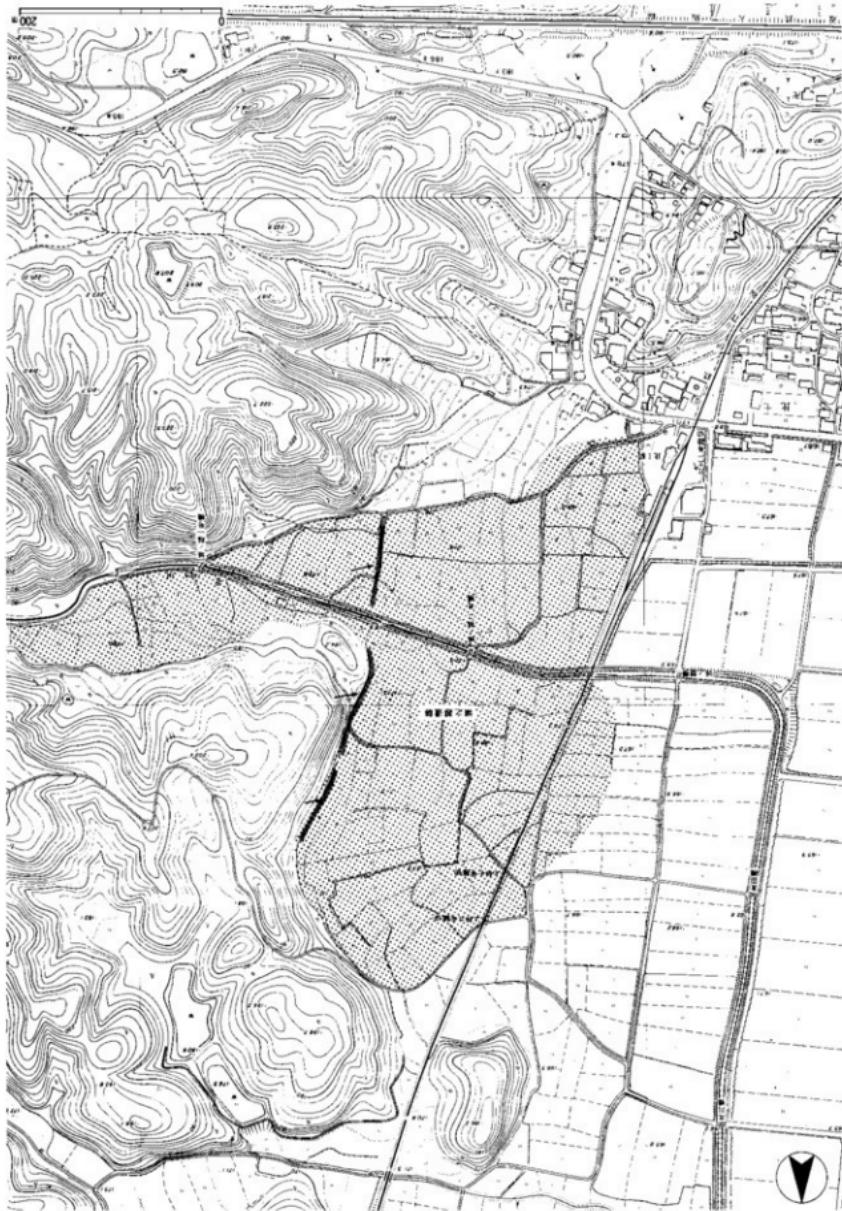
(1) 基本的層序

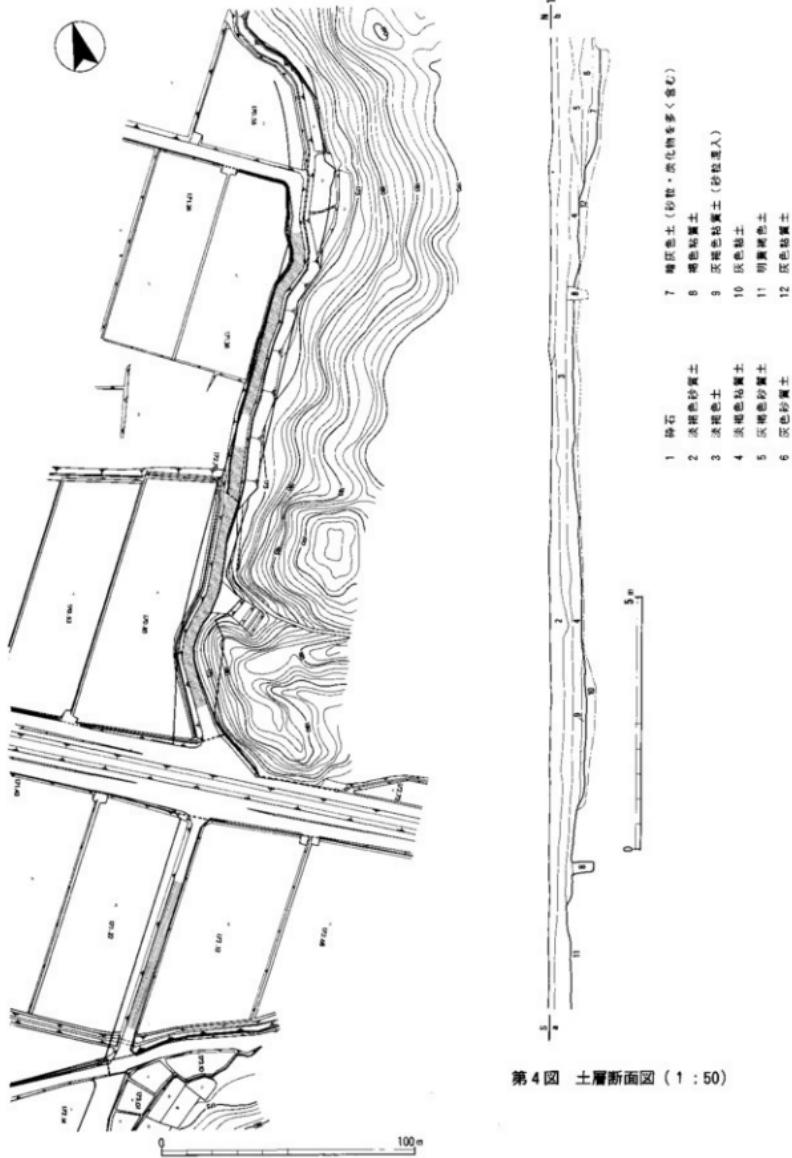
調査区が南北に細長いために場所によって層序は異なるが、基本的な層序は第1層：碎石・第2層：淡褐色砂質土・第3層：褐色土・第4層：淡褐色粘

質土・第5層：明黄褐色土（地山）となる。調査区は全体的に東から西に傾斜しており、東側は碎石直下が地山であった。

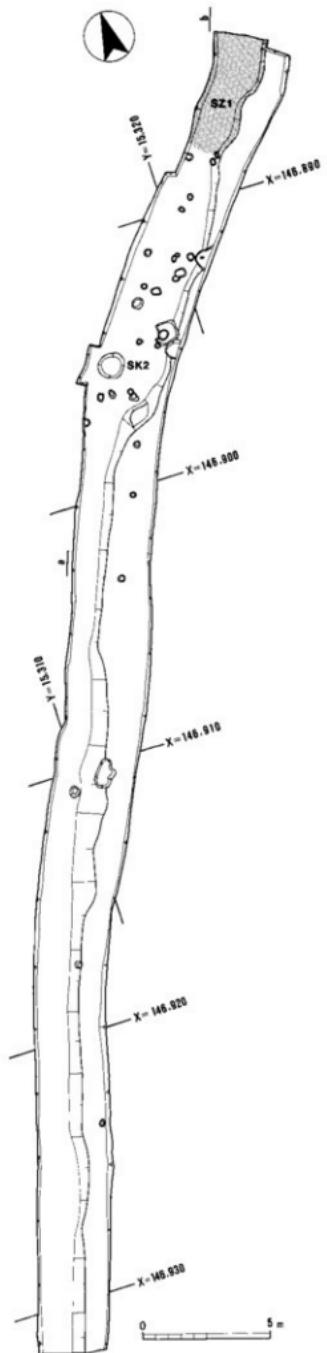
(2) 遺構について

第2図 滝野川流域地形図 1:5,000 (上野市都市計画図 1:2,500)





第3図 調査区位置図 (1 : 2,000)



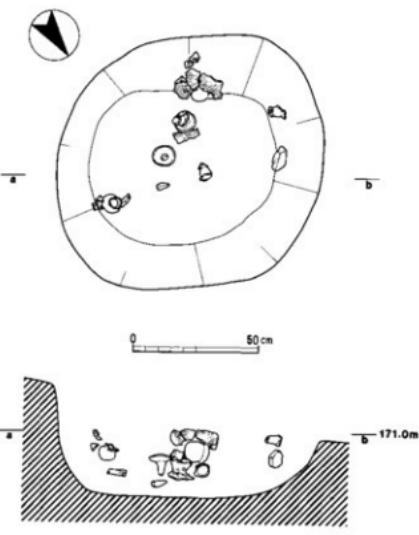
第5図 遺構平面図 (1 : 200)

ほぼ全面にわたっては場整備時に削平等の改変を受けており、からうじて城之越遺跡学習施設以北で遺構を確認したのみである。特に北川以南の城之越遺跡C地区部分は、道路建設の際に破壊が著しく路面から約2m掘削したが遺構面に到達することが出来ず調査を中止した。以下、検出した遺構について述べる。

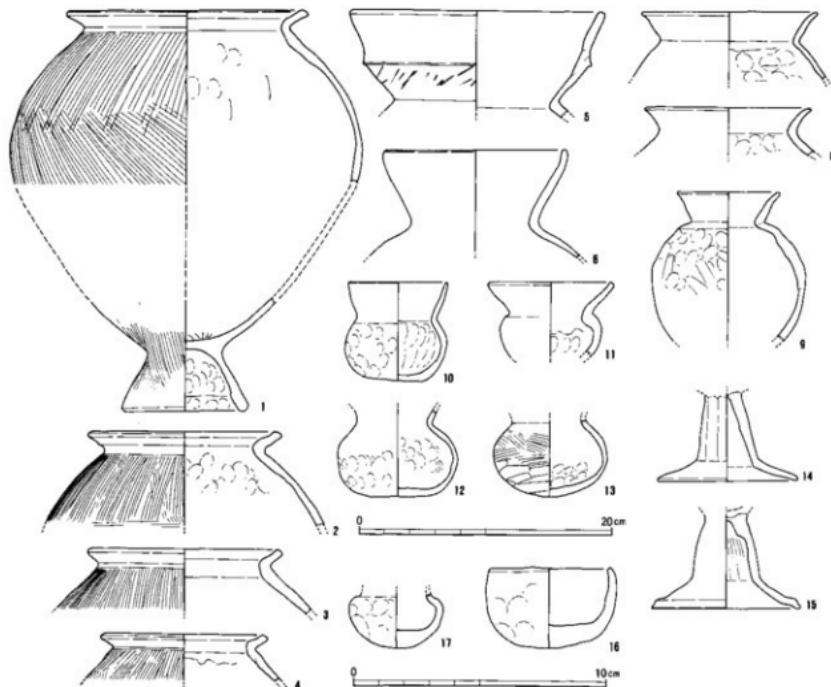
落ち込み S Z 1 調査区北端に向かって緩やかに傾斜する(トーン部分)。暗褐色～黒灰色系の埋土から、古墳時代中期の土師器の破片がまとまって出土した。しかし、遺構としての性格は不明で、一応ここでは落ち込みとしておく。

土坑 S K 2 深さ約0.6m、直径約1mの平面形はほぼ円形の土坑である。青灰色粘土を中心とする埋土で、最下層には厚さ数cmの腐植物の堆積が認められた。埋土中からは、古墳時代中期後半の土師器がまとまって出土した。遺物は完形で出土したものもあるがほとんどは破片である。また、浮いた状態で出土したものが多く、これは廃棄土坑であると考えられる。

その他いくつかのビットを検出したが、いずれも浅く建物としてはまとまらなかった。また、一部には直線的に並ぶ部分もあり、構が存在した可能性もある。



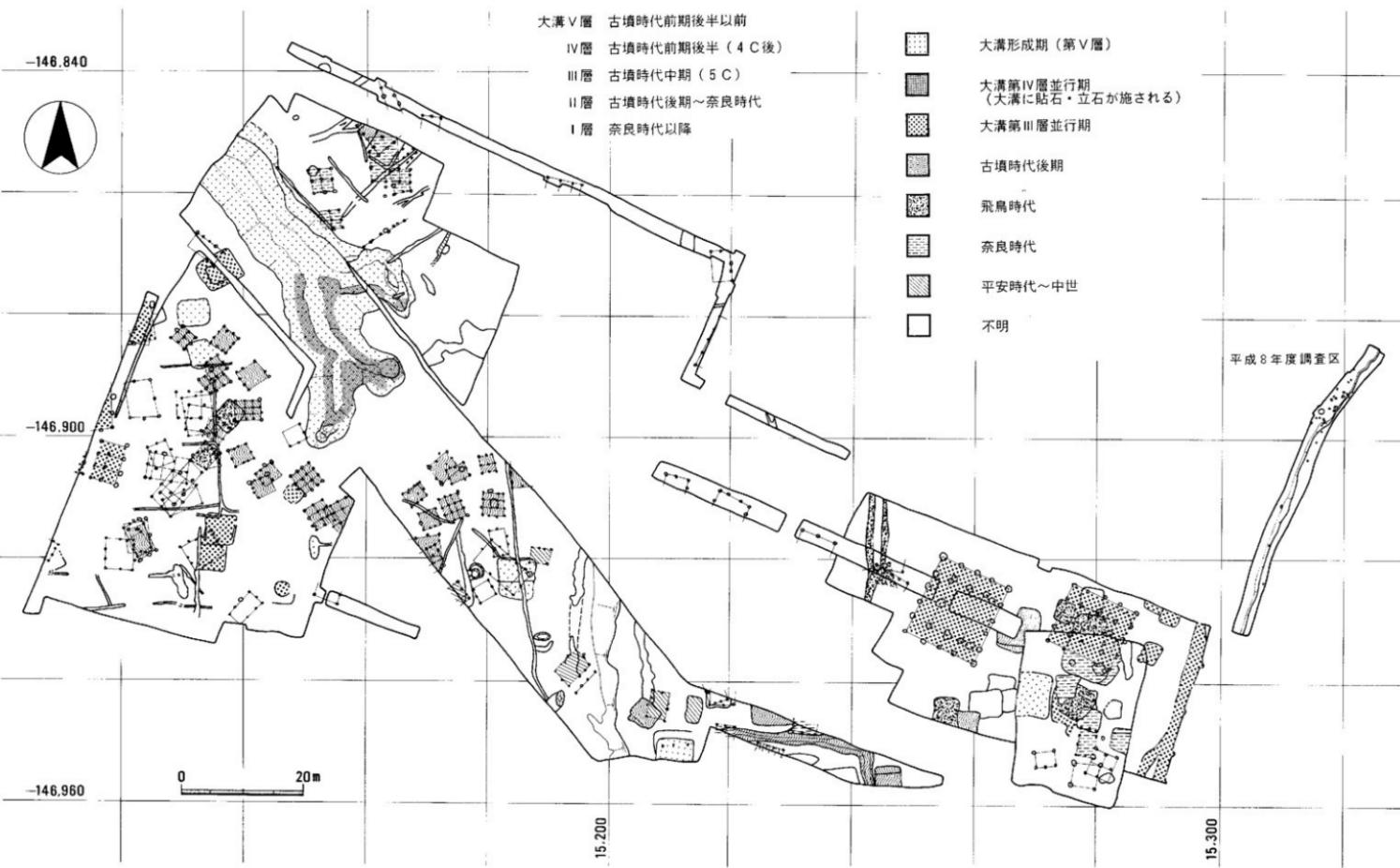
第6図 土坑 S K 2 遺物出土状況 (1 : 40)



第7図 出土遺物実測図 (1~15は1:4、16~17は1:2)

No.	実測番号	器種	出土遺物名	計測値	測量・技法の特徴	地土	焼成	色調	残存度	備考
1	0 0 4 - 0 1	土師器 台付盤	S Z 2 P. 1, P. 5	口: 19.0 底: 10.0	外: ヨコナデ・ハケメ 内: オサエ・ナデ	やや粗6.1~ 0.4mmの砂粒含	並	にぶい 焼	口: 傷か	
2	0 0 1 - 0 1	土師器 台付盤	S Z 1 土器集中点	口: 14.5	外: ヨコナデ・ハケメ 内: オサエ・ナデ	粗6~0.3mmの砂 粒含	並	にぶい 焼	口: 1/6	
3	0 0 2 - 0 1	土師器 台付盤	S Z 1 土器集中点	口: 14.7	外: ヨコナデ・ハケメ 内: ナデ	やや粗6~2.0mm の砂粒含	並	透黄焼	口: 1/6	
4	0 0 2 - 0 2	土師器 台付盤	S Z 1 土器集中点	口: 12.5	外: ヨコナデ・ハケメ 内: ナデ	やや粗6~2.0mm の砂粒含	並	にぶい 焼	口: 1/6	
5	0 0 1 - 0 2	土師器 盤	S Z 1	口: 19.6	外: ヨコナデ・ナデ 内: ナデ・オサエ	粗6~2.0mmの砂 粒含	並	にぶい 焼	口: 1/6 二重口端	
6	0 0 4 - 0 2	土師器 直	口: 14.4	外: ナデ 内: ナデ・オサエ	やや粗6.1~ 0.2mmの砂粒含	並	透黄焼	口: 傷か		
7	0 0 1 - 0 3	土師器 直	S Z 1 土器集中点	口: 13.9	外: ヨコナデ 内: オサエ・ナデ	やや粗6~2.0mm の砂粒含	並	にぶい 焼	口: 1/4	
8	0 0 1 - 0 5	土師器 直	S Z 1	口: 13.0	外: ナデ 内: オサエ・ナデ	粗6~1.5mmの砂 粒含	並	淡 黄	口: 1/6	
9	0 0 2 - 0 4	土師器 直	S Z 1	口: 8.0	外: ナデ 内: ナデ・ケズリ	粗6~1.5mmの砂 粒含	並	透黄焼	口: 1/6 体: 1/3	
10	0 0 5 - 0 3	土師器 直	S K 2 P. 1	口: 7.9 底: 7.9	外: ヨコナデ・オサエ 内: オサエ・ナデ	やや粗6.1~ 0.2mmの砂粒含	並	灰黄焼 ほぼ光沢	小型丸底器	
11	0 0 4 - 0 3	土師器 直	S K 2 P. 6	口: 9.9	外: ナデ 内: ナデ・オサエ	やや粗6.1~ 0.4mmの砂粒含	並	にぶい 焼	口: 傷か 小型丸底器	
12	0 0 5 - 0 4	土師器 直	S K 2 P. 7	体: 9.5	外: ナデ・オサエ 内: ナデ・オサエ	やや粗6.1~ 0.3mmの砂粒含	並	明灰焼 佳部のみ 光沢	佳部のみ 光沢	小型丸底器
13	0 0 2 - 0 5	土師器 直	S Z 1 底部下端	体: 9.1	外: ハケメ・ケズリ 内: オサエ・ナデ	やや粗6~2.0mm の砂粒含	並	にぶい 焼	佳部のみ 光沢	小型丸底器
14	0 0 2 - 0 3	土師器 直	S Z 1	底: 11.0	外: ヨコナデ・ナデ 内: ナデ・ヨコナデ	やや粗6~1.5mm の砂粒含	並	淡 黄	脚: 1/2	
15	0 0 5 - 0 1	土師器 高身	S K 2 底	底: 11.8	外: ナデ 内: オサエ・ナデ・ケズリ	やや粗6.1~ 0.3mmの砂粒含	並	にぶい 焼	佳部のみ 光沢	
16	0 0 3 - 0 1	土師器 直	S Z 1 土器集中点	口: 4.7 底: 3.2	外: オサエ・ナデ 内: ナデ	やや粗6~1.0mm の砂粒含	並	灰 黄	口: 傷か 手揉ね土器	
17	0 0 3 - 0 2	土師器 直	体	体: 3.7	外: オサエ・ナデ 内: オサエ	やや粗6~1.0mm の砂粒含	並	にぶい 焼	体: 1/4 手揉ね土器	

第1表 出土遺物観察表



第8図 城之越遺跡遺構配置図 (1:600)

ある。

(3) 遺物について

出土した遺物は、整理箱に換算して約11箱ある。古墳時代から中世までのものがあるが、大部分は古墳時代中期（5世紀後半）の土師器で、須恵器の出土はごく僅かであった。また、ほとんどが破片で図示できるものは少ない。ここで図示したものは、すべてS Z 1・SK 2からの出土である。以下、出土遺物の概略を記述する。個々の遺物の詳細については、出土遺物観察表を参照されたい。

1~4は台付壺である。1はSK 2から、2~4はS Z 1からの出土である。口縁部は肥厚し、端部を丸くおさめる。また、口縁部内面は指押さえによりわずかに窪む。体部外面には、一面にハケメが施される。すべて赤塚次郎氏のいう「S字状口縁台付壺」最終段階の「宇田型」に近い形態を呈する。

5~9は壺である。5はいわゆる二重口縁壺。口縁部上半及び内面はヨコナデで、口縁部下半はナデを施す。口縁部下半には、右上から左下への沈線が疊に認められる。9は丸底壺である。口縁部にヨコナデ、体部にナデを施す。体部外面にはケズリもみられる。全体的に器壁は厚く、全体的に粗い造りである。

10~13は小型丸底壺である。10~12はSK 2、13

はS Z 1から出土。10は口縁部を若干欠くが、ほぼ完形で出土した。口縁部は直立気味に開き端部でやや内側する。底部は、やや平底である。口縁部の内外面ともにヨコナデを、体部外面にオサエを施す。11は10に比べ口縁部は大きく外に開く。口縁部及び体部外面はナデを、体部内面にはオサエを施す。内面には粘土接合痕が認められる。12は体部のみ完形で出土した。体部内外面ともにオサエを、底部にナデを施す。10と同様に底部はやや平底である。13はS Z 1から、体部のみ完形で出土した。磨滅が激しく調整は不明瞭であるが、体部上半はハケメ、下半はケズリで調整する。

14~15は高杯である。14はS Z 1から、15はSK 2からの出土である。14は磨滅のため調整は不明瞭であるが、柱状部分外面には面取り風にナデを、脚端部にはヨコナデを施す。柱状部内面にはシボリ痕が認められる。15は、脚部のみがほぼ完形で出土した。柱状部分は、内面のオサエが強く下半部の外面はふくらんでいる。そのため、坏部との接合部分がくびれた形状を呈する。また、脚端部は面取り状にナデが施され、裾部との境に段が形成される。

16~17は手捏ね土器で、16はS Z 1からの出土、17は調査区付近の水田からの表探である。

3 結 語

今回の調査では、期待していた大溝の延長部分は確認することは出来なかった。肩部分が検出されなかつた事実から、大溝は調査区すぐ西側の水田部分を走っているものと考えられる。調査の結果、大溝推定ラインのさらに東側で遺構が存在することが確認され、城之越遺跡の範囲は丘陵裾ぎりぎりの所まで拡がっていることがわかった。しかし、調査地は先行して実施された農道工事の際に丘陵裾部分が大幅にカットされており、遺構はSK 2のように地形的に低い部分にからうじて残った状態で確認されたのみであった。また、検出されたピットは一部に直線的に並ぶ部分もあり、柵が存在した可能性も否定できない。また、工事の際に土器等の遺物が出土していたという地元の方の話もある。一部とはいえ事

前の調査なしに貴重な遺構が破壊されたことは、非常に残念であると言わざるをえない。

今回の調査は、限られた条件の中での調査であり多くの語ることは出来ない。しかし、丘陵裾ぎりぎりのところまで城之越遺跡の広がりが確認できたことは大きな成果であった。

（木野本和之）

【註】

① 梶原裕昌『城之越遺跡』三重県埋蔵文化財調査報告99-3、三重県埋蔵文化財センター、1992年。

② 赤塚次郎「最後の台付壺」『古代』86号、1988年。

図版1



調査前風景（南から）



表土掘削風景（北から）



作業風景①（南から）



作業風景②（北から）



作業風景③（東から）



S K 2 実測風景（南から）



S Z 1 遺物出土状況 1（東から）



S Z 1 遺物出土状況 2（南から）



B 調査区調査後全景（北から）



S K 2 遺物出土状況（東から）

图版 3



2



3



4

出土遗物(1)



10

出土遗物(3)



15

出土遗物(2)



13

出土遗物(4)



1



出土遗物(5)

II 上野市摺見 鶴ヶ尾古墳群

1 位置と歴史的環境

鶴ヶ尾古墳群（1）は上野盆地を構成する小盆地の一つ、比自岐盆地の南東隅の丘陵部に位置し、行政上は上野市摺見字鶴ヶ尾で、標高約236～232m、現況は山林である。

縄文時代の伊賀地方は、現時点で確実に草創期と見られる遺跡は確認されていないものの、前期～晚期に至る縄文時代の遺跡の確認は確実に増えつつある。当古墳群周辺にも、早期末と思われる落とし穴



第9図 遺跡位置図 (1:50,000) [国土地理院 上野、名張 1:50,000より]

●■は古墳 無印枠は主要古墳群 ▲は銅鐸出土地等

が東西方向に4カ所設けられ、当時狩猟場であったことがうかがえる勝地大坪遺跡⁽²⁾、3基の土坑と北白川下層Ⅱb～Ⅱcを中心とする縄文前期の土器や多くの石器類が確認され、石器製作の作業場兼仮設のベースキャンプと考えられる源鳥C遺跡⁽³⁾、縄文後期の遺構が確認された才良遺跡⁽³⁾、縄文晩期の上部の構造物・付属物を伴う貯蔵穴が確認された森脇遺跡⁽⁴⁾などが位置する。当然比自岐盆地周辺も縄文時代の人々の活動が活発になっていったのであろう。

弥生時代に入ると伊賀地方の人跡はより明確になり、当古墳群周辺でも、弥生後期の土器が多量に出土した才良遺跡⁽⁵⁾、弥生後期の土器、木製品が出土した森寺遺跡⁽⁵⁾、弥生後期の方形周溝墓が検出された浮田遺跡⁽⁶⁾、弥生後期の掘立柱建物が検出された澤田遺跡⁽⁷⁾や、森脇遺跡でも弥生時代後期の竪穴住居が検出されている。これらの遺跡から出土する土器の中には近江地方の影響を受けるものもあるが、畿内の影響が強いものが大半である。また、弥生時代の伊賀地方では、比土⁽⁸⁾や青山町柏尾⁽⁹⁾などの銅鐸の確認状況から、地域的なまとまりは盆地や谷筋などの単位が主で、広域的なつながりは未成熟であったと思われる。

しかし古墳時代には、伊賀地方でも地域的なまとまりがより広域的なものになってくると思われ、その状況を示すように前方後円墳が出現してくる。

当遺跡西方約2.5km、比自岐盆地北縁の丘陵上に4世紀末頃築かれた石山古墳⁽¹⁰⁾は、全長120mの前方後円墳で、その副葬品や埴輪配列法等から畿内勢力との関係が考えられている。4世紀後半以降の大規模な古墳時代の祭祀遺跡である城之越遺跡⁽¹¹⁾を挟み、石山古墳から南西方向約5kmには、殿塚古墳⁽¹²⁾をはじめ4世紀末～6世紀前半に築造された前方後円墳・帆立貝形古墳を中心とする美旗古墳群があり、これらの古墳に関係する首長層は、少なくとも、律令期の名張郡・伊賀郡に該当する伊賀南部地域全体の代表者として、畿内勢力と関わったものと考えられ、石山古墳の被葬者もその一人であったと思われる。また、比自岐盆地のほぼ中央部に位置する王塚古墳⁽¹³⁾は、6世紀初頭後に築造された全長48mの前方後円墳で、円筒埴輪や朝顔形埴

輪の他、赤・白・緑色の顔料を留める形象埴輪片などが出土し、石山古墳の何代か後の系譜を引く首長に関係するものと考えられている。

古墳時代後期に入ると、伊賀地方でも多くの群集墳が営まれることとなるが、当古墳群周辺では久米山丘陵に位置する久米山古墳群や、木津川上流部の青山町に位置する桐ヶ谷古墳群⁽¹⁴⁾をはじめとするいくつかの古墳群等がある。比自岐盆地やその周囲の丘陵上に分布する古墳に関して、後期の群集墳が多数分布すると思われるものの、その詳細は不明である。

また横穴式石室に関しては、伊賀地方では6世紀前半には導入され、名張市琴平山古墳は6世紀初頭の築造とされる他、群集墳中でも名張市に位置する古墳群の中にT K10期には築造されたと思われるものもあり、当古墳群周辺では、6世紀中頃～7世紀前半の3基の石室が確認された青山町勝地大坪古墳群⁽²⁾などで、近年横穴式石室の調査が実施されている。伊賀地方が畿内の影響を強く受けているであろうことは、その地理的状況からも推測できるが、特に伊賀南部地域では横穴式石室の導入当初から畿内的な影響が強く、このような影響を受けた石室は、大和地方から伊勢湾にかけて線的な分布状況が指摘されており、伊賀南部地域では少なくとも石室の技術的伝播に関して、後の飛鳥時代における飛鳥～伊勢神宮への経路が重要な役割を果たしたのであろう。

比自岐盆地やその周囲の丘陵に関しては、上寺古墳⁽¹⁵⁾が石室を有し、また丸山古墳⁽¹⁶⁾も現況の外観からは横穴式石室の可能性がある他、6世紀後半～7世紀初頭のものと考えられる石神塚1号墳⁽¹⁷⁾・2号墳⁽¹⁸⁾のうち、1号墳の埋葬施設が横穴式石室の可能性もある。

当古墳群周辺の古墳時代の集落跡としては、古墳時代初頭～後期の54棟の竪穴住居や古墳時代前期の水田跡が確認された北堀池遺跡⁽⁹⁾や、古墳時代前期～後期の竪穴住居が確認された浮田遺跡⁽⁹⁾、古墳時代中期～後期竪穴住居や大溝などが検出された高瀬遺跡⁽¹⁹⁾、多数の古墳時代中期の竪穴住居や掘立柱建物が検出された原ヶ野遺跡⁽²⁰⁾、古墳時代後期の竪穴住居が検出された森脇遺跡⁽²¹⁾などが位置し、比自岐盆地内でも馬場西遺跡⁽²²⁾で6世



第10図 遺跡地形図 (1:5,000)

このように、鷺ヶ尾古墳群の周辺は縄文～古墳時代にかけての遺跡も密集する地域である。

律令期の伊賀地方は、阿拝郡、山田郡、伊賀郡、名張郡の4郡からなり、これらの各郡は少なくとも古墳時代以来の地域的なまとまりを基本としていると思われ、これら4郡のうち国名と同一名称を持つ伊賀郡の重要性が指摘されている⁹。その点からも伊賀郡に属す比自岐盆地周辺が古墳時代の重要な地域に位置すると言える。

ところで比自岐盆地周辺は、伊賀郡のうち阿我郷に属すが、阿我郷については、藤原実遠所領讓状案には阿我郷内に比奈村、火食村、上津阿保村、中津阿保村、古郡村、上津田原村の6ヶ村を上げ、また「日本地理志」では比自岐郷比自岐、岡波、森、界外、摺見、桝川六村、北山、勝地、妙楽寺、澣、下河原、伊勢路、奥鹿野に比定する。³⁹このことから、おそらく古墳時代にも比自岐盆地を中心とした地域と、上津、北山、勝地、妙楽寺など現在の青山町北部地域との関係は深かったものと思われる。

【註】

- ④ 竹内英昭「遺跡・源鳥C遺跡出土の石器群と遺跡の評価」『上野新都市開発整備区域埋蔵文化財発掘調査報告書－第1分冊－』上野市遺跡調査会 1994

④ 吉澤 良「勝山大坪遺跡・勝地大坪古墳群」『平成3年度農業基盤整備事業地城埋蔵文化財調査報告－第1分冊－』三重県埋蔵文化財センター 1992

④ 竹内英昭『No.1388(源鳥C遺跡)の調査』『上野新都市開発整備区域埋蔵文化財発掘調査報告書－第1分冊－』上野市遺跡調査会 1993

④ 徳橋裕昌「才賀遺跡」『平成2年度農業基盤整備事業地城埋蔵文化財発掘調査報告－第3分冊－』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1991

⑤ 前川衣久、田中秀と「昭和63年度(第1次)森脇遺跡発掘調査報告書』上野市遺跡調査会 1995

⑥ 西森平之「大塚遺跡発掘調査報告」上野市教育委員会 1983

⑥ 岩田直純、「才賀遺跡」『昭和元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第1分冊－』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1991

⑥ 斎藤平之「森寺遺跡」『下郡第二地区区间遺跡発掘調査報告』上野市教育委員会・上野市遺跡調査会 1984

⑥ 森川常輔・根岸裕昌「浮田・高瀬遺跡」『平成2年度農業基盤整備事業地城埋蔵文化財発掘調査報告－第3分冊－』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1991

⑥ 飯田直純、「丹波日跡」『昭和元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第1分冊－』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1991

⑦ 徳橋裕昌「伊賀遺跡」『日本の古代遺跡52選』保育社 1996

⑦ 井林幸司「三重県名石郡石山古墳」『日本考古学年報－5』

（復刻版） 1980
京都大学文部科学考古学研究室『紫金山古墳と石山古墳』京都大学文学部博物館 1993
高橋義典「歴史発掘⑥ 墓輪の世紀」講談社 1996
徳橋裕昌ほか「城之越遺跡」三重県埋蔵文化財センター 1992

⑪ 山田 猛「玉座古墳」『昭和53年度供営施設整備事業地城埋蔵文化財調査報告4』三重県教育委員会 1979

⑪ 竹内英昭『三重県の横穴式石室研究』『研究紀要 第4号』三重県埋蔵文化財センター 1995

⑫ 註⑪に同じ

⑫ 註⑪に同じ

⑫ 上野市教育委員会『三重県・上野市遺跡地図』1992

⑫ 山田 猛「石神1号・2号墳』『昭和54年度京阪整備事業地城埋蔵文化財発掘調査報告』1980

⑫ 吉本義夫ほか「北坂池遺跡発掘調査報告 第1分冊』三重県教育委員会 1981

⑫ 山田 猛ほか「北坂池遺跡発掘調査報告 第2分冊』三重県教育委員会 1992

⑫ 註⑫に同じ

⑫ 服部秀人『三重県・高瀬遺跡』『月刊 考古ジャーナル289』ニューサイエンス社 1988

⑫ 註⑫に同じ

⑫ 註⑫に同じ

⑫ 註⑫に同じ

⑫ 山田 猛「馬場西遺跡」『昭和52年度県営開場整備事業地城埋蔵文化財調査報告2』三重県教育委員会 1978

⑫ 福永正三『秘藏の国』 1973

⑫ 「三重県の地名」『日本歴史地名体系第24巻』平凡社 1983

2 遺構

(1) はじめに

鷺ヶ尾古墳群が位置する丘陵からは比自岐盆地を一望に見渡すことができ、王塚古墳や石山古墳も見下ろす場所であり、古墳の頂上部と北方の現道との標高差は約30mをはかる。

この丘陵部分が広域営農団地農道整備事業（伊賀3期地区）の事業予定地と照会を受けた三重県埋蔵文化財センターは、同事業予定地内の分布調査を実施し、丘陵尾根部分の頂上に古墳の可能性がある平面円形の二つの高まりを確認したため、事業に先立ち平成8年2月20日～22日にかけて試掘調査を実施した。その結果、2基の古墳が近接して存在することが確認され、これらを地蔵川古墳群と呼称し、北に位置する古墳を地蔵川1号墳、南に位置する古墳を地蔵川2号墳とした。この取り扱いについては、その保護に努めるよう県農林水産部や農村振興課、上野農林事務所、県埋蔵文化財センターの間で協議を重ねたが、現状保存が困難なため、やむなく事前に発掘調査を実施し、記録保存を図ることとした。

調査開始後、当古墳群は小字名鷺ヶ尾の地域に位置することが判明したため、鷺ヶ尾古墳群と名称変更し、北を鷺ヶ尾1号墳、南を鷺ヶ尾2号墳とした。

また、1号墳・2号墳調査中、工事施工範囲外の丘陵上に新たに古墳を1基確認し、鷺ヶ尾3号墳とした。

調査は現況の墳丘測量を実施した後、1号墳の北部から2号墳の南部にかけて約40mの南北トレンチ1カ所、1号墳に約23mの東西トレンチ1カ所、2号墳に約19mの東西トレンチ1カ所の、計3カ所のトレンチを設定し、調査を開始した。

その他、3号墳の西方約30mの工事施工範囲内に、古墳状の高まりが認められたため、トレンチ調査を実施したが、同高まりは自然地形であった。

(2) 1号墳

a 墳丘・周溝

調査前の墳丘測量図から標高235.4m前後の等高線を墳丘裾部とする、径約14.0m、高さ約1.2mの円墳と想定された。調査前の現況は山林で、墳丘頂部の標

高は236.608mである。東部分の等高線が乱れ、南北に長い楕円形に近い形状となることから、後世の林道の取り付けや植林などの際に東部分が削平を受けたものと思われる。

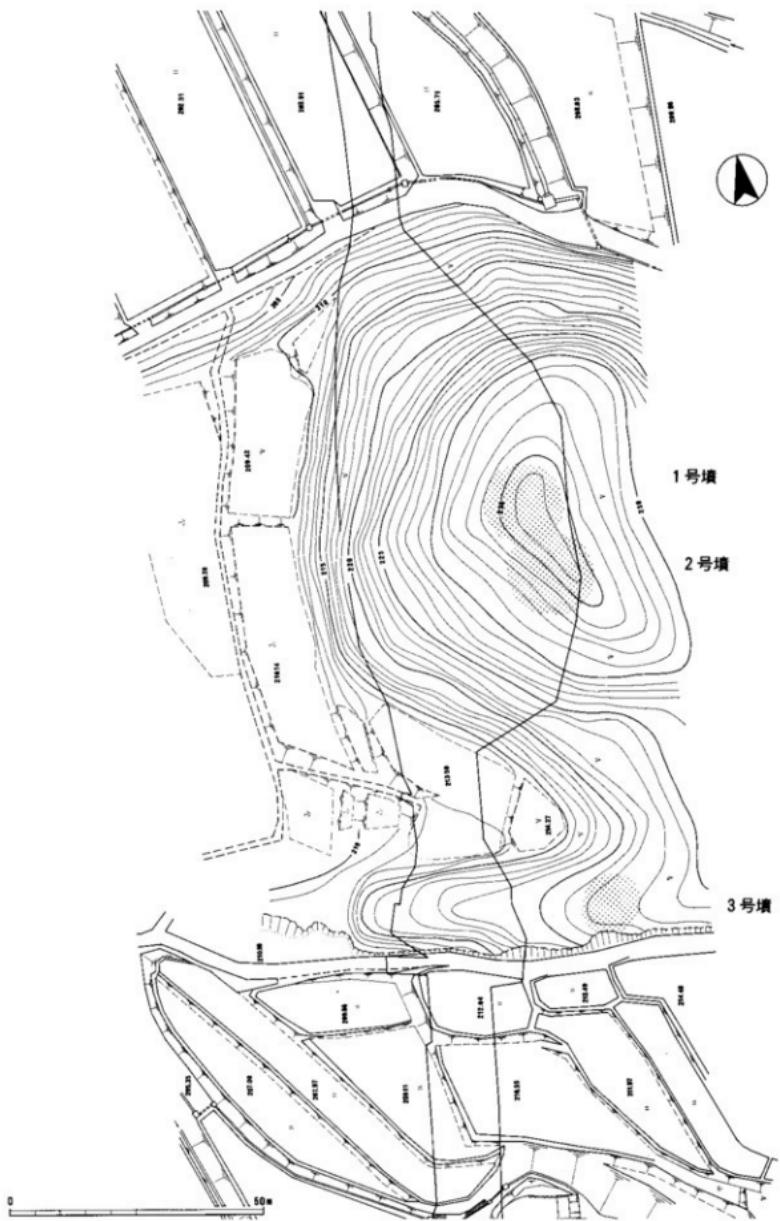
トレンチ調査の状況から墳丘頂部付近の層序は、腐葉土・青灰褐色土・暗橙色土（第13図1層、2層、12層）の順で、当初暗橙色土を地山と考え、1号墳は地山削り出しの手法によって墳丘を築造した古墳と判断し調査を続行した。しかし、この暗橙色土には若干の炭化物が含まれることを確認したため、さらにトレンチを40～50cm掘り下げたところ、この層は地山ではなく、墳丘盛土であると判断した。結果1号墳は、径約14.5m前後（周溝内側下端を基準）、高さ約1.8m、周溝幅約1.0～2.0m、周溝最深部から墳丘最頂部までは約2.4mをはかる。墳形は円墳であるが、北西部分、南西部分とともにやや直線的な形状を呈し、また東部は後世に削平を受けたためか中心部へ向かってやや窪み、周溝部分も確認できなかつた。遺存する盛土の厚さは最大約1.2mで、周溝および周囲の丘陵部を削りとった土を使用したものと思われ、盛土は周囲の地山土と同質のものである。また、盛土の最下層と地山面との間に旧表土と思われる層は確認できなかつた。

周溝は北部と南部（2号墳と共有か）は深く掘削したものであるのに対して、西部の掘削は浅く、斜面を平坦に削ったのみの部分もあるが、墳丘の範囲は明確に意識している。

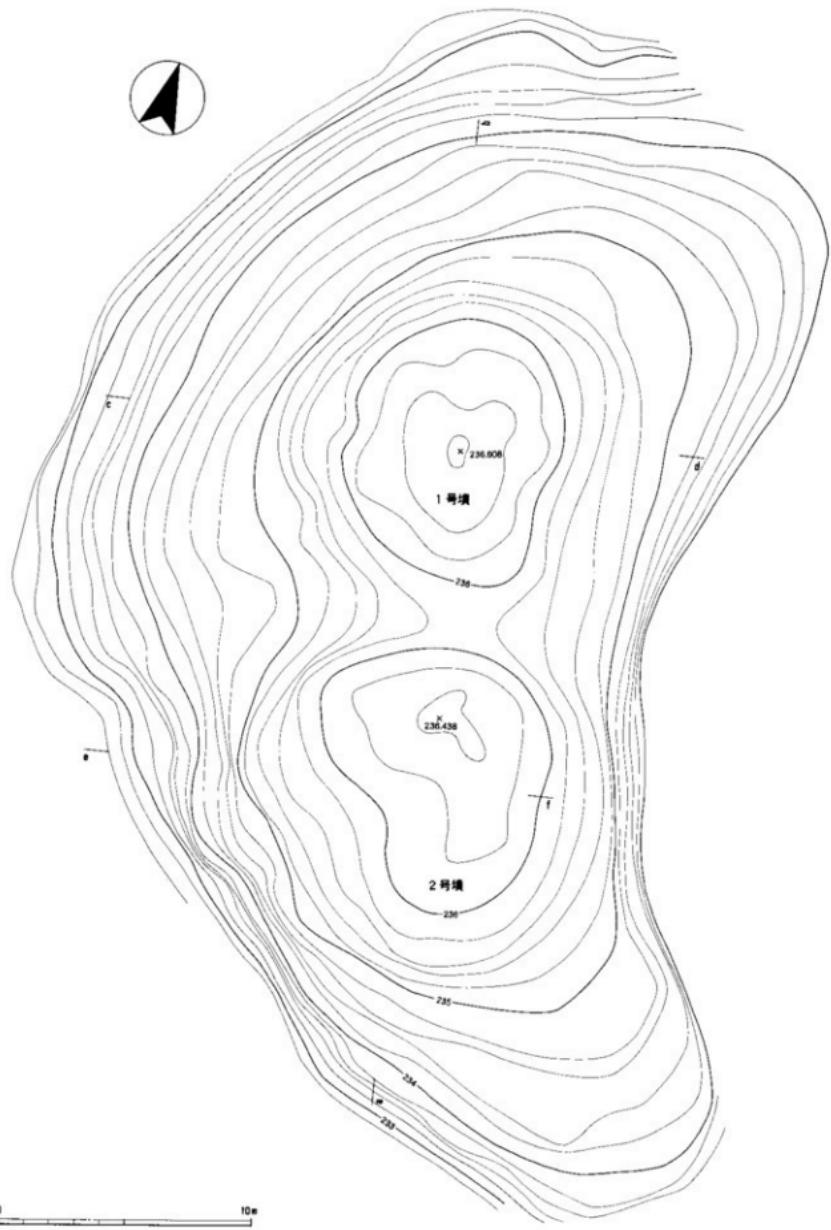
盛土の淡褐色土層（第13図15層）中から土師器短頸壺、須恵器壺が完形で出土し、周溝北部からは須恵器杯身・杯蓋がそれぞれ5個体以上や須恵器壺片が集中していた他、土師器片・壺片などの遺物が出土した。また他に墳丘盛土検出時に古墳時代の土師器片、須恵器片が出土した他、墳丘盛土中から弥生以前（遺存状態が悪く確定できず）と思われる土器片が、墳丘盛土中や周溝埋土から縄文時代の石鏃や石匙などのサヌカイト製の石器類が出土した。

b 埋葬施設

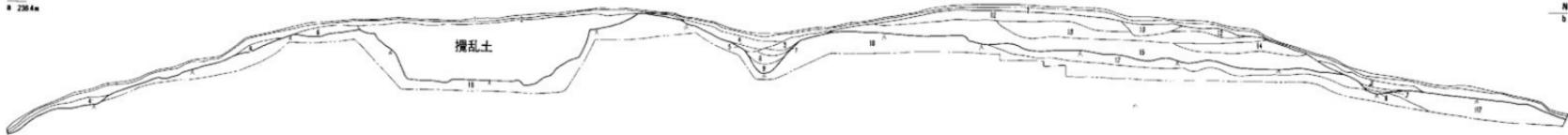
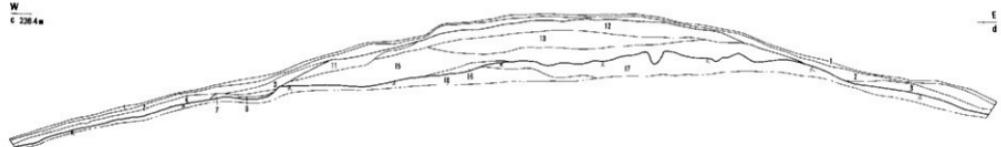
埋葬施設は確認できなかつたが、石室を築造した



第11図 調査区位置図 (1 : 1,000)



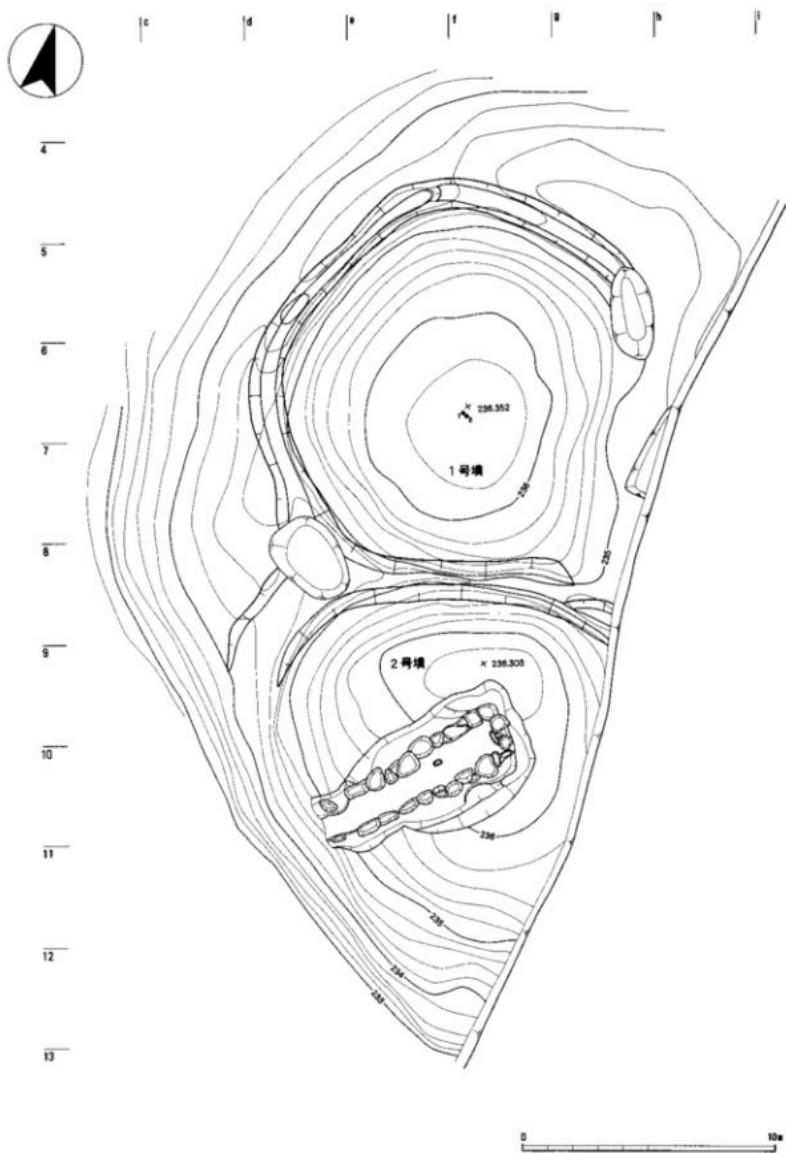
第12図 1号墳・2号墳調査前測量図 (1 : 200)

S
2384mW
2384mW
2384m

- 1 : 黒紫土
 2 : 青灰褐色土
 3 : 淡灰褐色土に炭化物が混入（3より暗い）
 4 : 淡灰褐色土に炭化物が混入（4より暗い）
 5 : 淡灰褐色土に炭化物が混入（4より暗い）
 6 : 灰粉色土
 7 : 灰褐色土
 8 : 青褐色土
 9 : 灰褐色土
 10 : 青灰褐色土（2より暗い）
 11 : 灰灰褐色土（盛土）
 12 : 灰粉色土（盛土）
 13 : 灰橙色土（盛土）（12より暗い）
 14 : 淡褐色土（盛土）
 15 : 淡褐色土（盛土）（14より明るい）
 16 : 明灰褐色土（盛土）
 17 : 粉色土（地山）
 18 : 粉色砂礫層（地山）

第13図 1号填・2号填土層断面図（1:100）





第14図 1号墳・2号墳調査後測量図（1：200）図中●印1・2は遺物1・2出土地点

痕跡はないこと、周溝埋土中より出土する土器が何らかの祭祀に伴うものならば、埋葬施設以外での祭祀が行われたと思われることなどから、おそらく木棺直葬墓であったと思われる。隣接する2号墳の埋葬施設が盜掘を受け、墳丘頂部もかなり削平されている可能性があることから考えて、1号墳の墳丘頂部が削平され、埋葬施設も既に破壊されたと思われる。

(3) 2号墳

a 墳丘・周溝

調査前の墳丘測量図から標高235.2m前後のライン付近を墳丘裾部とする、径約14.0m、高さ約1.2mの円墳と想定された。1号墳同様墳丘は盛土の可能性も考えられたが、調査の結果、遺存部分の墳丘は地山削り出しにより築造された円墳と確認した。

南部分はおそらく後世の林道設置等のため大きく削平を受けたと思われ、また東部約1/4は調査対象外であったため墳丘の規模は確定できないが、推定径約14.5m、高さ約1.7mである。周溝は幅約1.4~2.5m、深さが約0.15~0.4mで、周溝の西部は1号墳同様斜面を平坦に削るものであり、周溝最深部から墳頂部までは約1.74mを測る。

b 埋葬施設

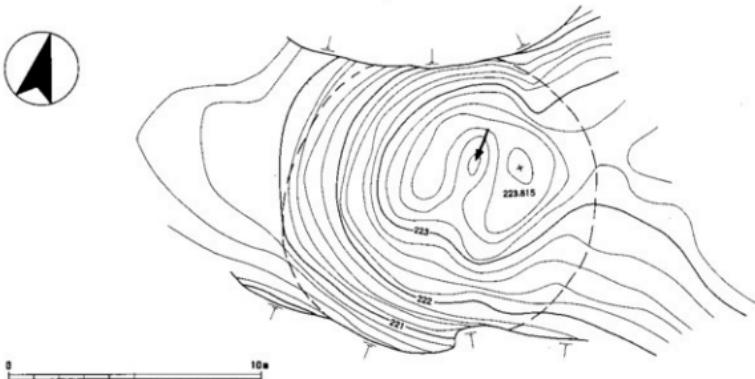
横穴式石室があるが、後世の盜掘により石材をもすべて抜き取られたうえに、床面も含め完全に破壊されており、主体部の掘り方についても明確には確

認できなかった。しかし石材の抜き取り痕跡から、玄室の右壁部分が張り出す片袖式のもので、平面規模は、確認できた全長が7.6m、玄室長3.0~3.2m、玄室の奥壁幅1.4m、玄門幅1.3m、袖の張り出し部分0.4m、羨道幅1.0~1.1m、羨道の遺存長4.4mを測り、主軸はN133°Wで、南北方向へ開口する。墳丘の遺存最頂部から、石材の抜き取り痕跡が検出できる面までの深さは、最大約1.5mである。土師器高杯、須恵器壺、須恵器杯身・杯蓋、須恵器碗などの土器類の他、小刀、鉄族、耳環の金属製品が出土したが、すべて擾乱土中から出土したもので、原位置を保つと思われるものはなかった。耳環が4個体出土したことから、この石室への埋葬者は2人以上と考えられる。また、擾乱土の上層部分からは土師器皿、ロクロ土師器皿等の遺物も若干出土した。

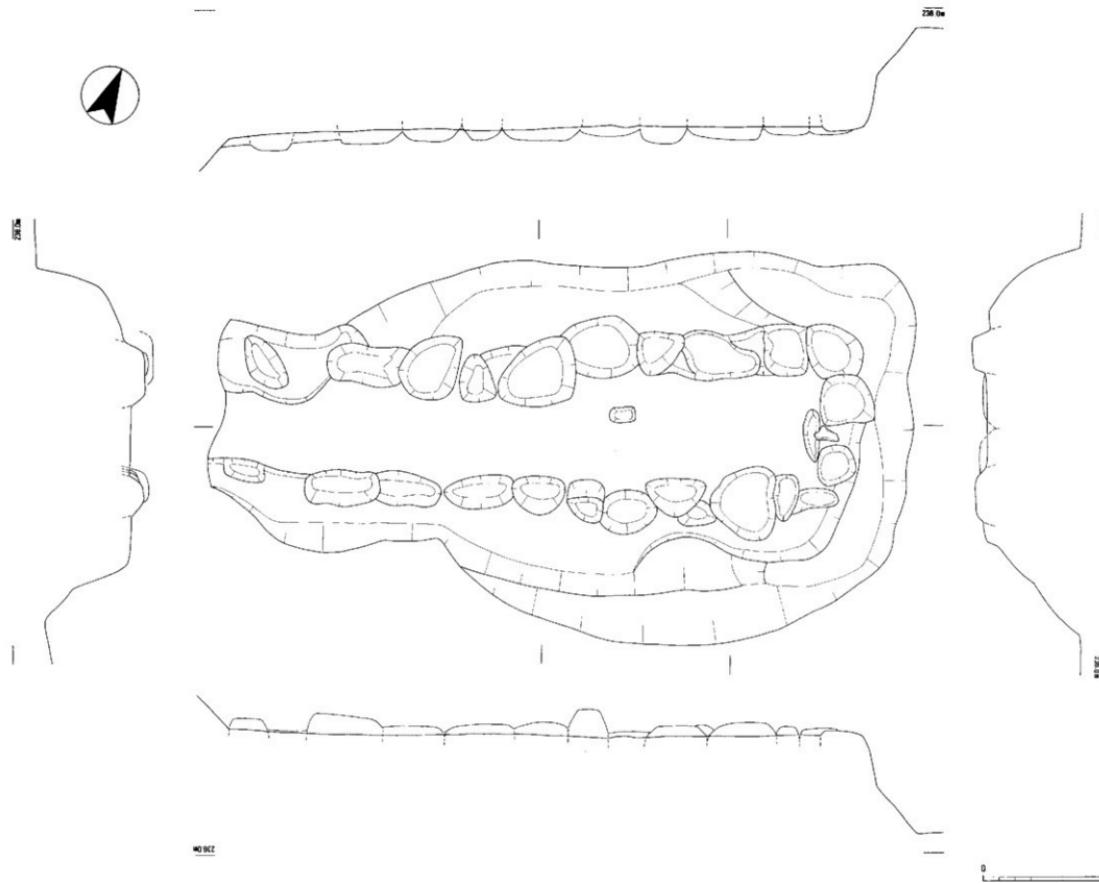
(4) 3号墳

2号墳の南方約60mに位置し、1号墳・2号墳が位置する尾根筋から西へ延びる支丘陵上の斜面に営まれた古墳である。今回の工事施工範囲外のため発掘調査の対象ではないが、土地所有者の方や地元の方々のご好意で現況の測量を実施することができた。

現況の測量図からは径約10.0m、高さ約1.0mの円墳と思われる。頂部に長さ約4.0m、幅約2.0m、深さ約0.7mの窪みがあり、埋葬施設は既に盜掘等を受けたものと思われるが、南方向に開口する横穴式石室と思われる。



第15図 3号墳現況測量図（1:200）



第16図 2号填石室跡実測図 (1 : 50)

3 遺 物

(1) 1号墳出土遺物

1号墳では盛土中および周溝埋土から出土したものが主な遺物である。

土師器短頸壺（1） 1号墳中央やや南寄り、墳丘盛土（第13図15層）中より倒立した状態で出土した。口径約3.7cm、器高6.6cmで、体部の最大径は9.4cmではば中央部にある。体部の外面は風化が著しいため、調整は確認できない。頸部は外面ともにナデを施し、約1.0cmの高さで、体部に対してはば直行するようたちあがり、口縁端部をつまみだす。頸部内面全面、および頭部外面約3/4、体部外面上部約1/2にかけてススが付着する。器形は一般的な土師器壺のものではなく、あるいは須恵器短頸壺の器形を意識して形成したものかもしれない。

須恵器壺（2） 1号墳中央やや南寄り、墳丘埋土（第13図15層）中より正立した状態で出土した。口径6.7cm、器高9.9cmで、体部の最大径は10.8cmで上部約1/3部分にある。底部外面に回転ヘラケズリを、体部外面下部に回転ナデを、体部外面上部から頸部にかけて横方向のカキ目を施す。頸部は体部に対してもば直行してつまみ上げた後、口縁端部をやや外方向につまみだす。

須恵器杯（3～9） いずれも1号墳周溝北部の埋土中より出土した。杯蓋（3～5）は口径15.2～14.6cm、器高3.2～4.4cmで、いずれも天井部外面約1/2に回転ヘラケズリを施し、口縁端部に段は認められない。3は他よりもやや丸味を帯びる。杯身（6～9）は口径12.0～13.1cm、器高は3.7～4.7cmで、口縁は内向し、口縁端部は丸く、底部外面約1/2に回転ヘラケズリを施す。これらの須恵器杯のうち4・5・8は、田辺昭三氏による須恵器編年（以下「田辺編年」と表記）のTK43期に、3・6・7・9はTK209期に相当すると思われる。いずれも細片の状態で、須恵器壺片とともに1カ所に集中して出土したことから、これらを意図的に破碎し周溝内に投棄した状況が推測され、何らかの祭祀に関連する可能性が考えられる。

(2) 2号墳出土遺物

2号墳では石室跡の擾乱土中より出土したものが主な出土遺物である。

須恵器椀（10） 石室跡の擾乱土中より出土した。焼成時に大きく歪んだものと思われ、口径は11.8～8.7cm、器高は4.2～5.0cmで、内外面ともに回転ナデを施し、口縁端部は丸く、体部中央やや上部に2本の沈線が巡る。

須恵器杯（11～16） 石室跡の擾乱土中より出土した。杯蓋（11～13）は推定口径10.9～13.8cmで、口縁端部は丸く、内外面とも回転ナデを施し、12には天井部に回転ヘラケズリが見られる。杯身は口径11.0cm前後、器高4.0cm程度で、口縁部分が短く、内外面とも回転ナデを施すもの（14・15）と、口径13.3cm、器高4.5cmで、底部外面約1/2に回転ヘラケズリを施すもの（16）がある。これらの須恵器杯のうち12・16は「田辺編年」のTK209期に、その他はTK217期に、相当すると思われる。

小刀（17～19） 石室跡の擾乱土中より出土した。17は刀身部分の遺存長が18.6cm、柄部分の遺存長が5.4cm、棟幅は1.0～1.5cmと肉厚で、刀身断面五角形の鑄造の小刀である。柄部分には目釘が遺存する。

18は刀身の先端部分で、遺存長4.6cm、棟幅0.5cmを測る。19は刀身部で遺存長2.1cm、棟幅0.5cmを測る。

鉄鎌（20・21） 石室跡の擾乱土中より出土した。20は有茎長三角形鎌の鎌身部分で、長さ4.1cm、最大幅1.6cmを測り、断面方形の茎部を有す。21は断面方形の茎部で、遺存長3.6cm、厚さ0.8cmを測る。

耳環（22～25） 石室跡の擾乱土中より出土した。いずれも銅芯金張りのもので、ほぼ正円に仕上げてある。22・23は径2.3～2.6cm、24の径は2.8～3.2cm、25の径は2.7～3.0cmで、いずれも断面は円形で直径は22・23が0.5cm、24・25は0.8cmで、重さは22が7.0g、23が8.2g、24が19.6g、25は19.2gである。金箔は25が9/10程度遺存するが、22は1/5程度、23・24は微量に遺存する。それぞれの規格から、22と23が対に、また24と25が対になると思われる。

(3) その他の出土遺物

古墳時代の遺物の他、縄文時代の石器類や時期不

明の遺物が出土した。

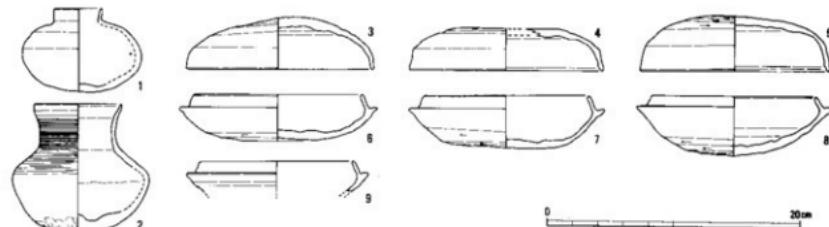
石匙（26） 1号墳周溝埋土から出土した。横型で正三角形に近い平面形を呈し、薄手のもので、サスカイト製である。

石鎌（27～29） 27は1号墳盛土より、28・29は1号墳周溝埋土より出土した。いずれもサスカイト製の凹基無茎鎌である。

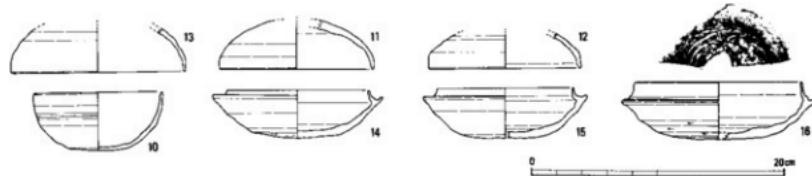
石錐（30） 2号墳墳丘検出時に出土したサスカイト製のもので、側縁の片側に調整跡が認められ、石錐と思われるが、なんらかの未製品とも考えられる。

これらの石器類は、石匙の形態が縄文前期と思われる特徴を示すことから、石鎌等も同時期のものであろう。

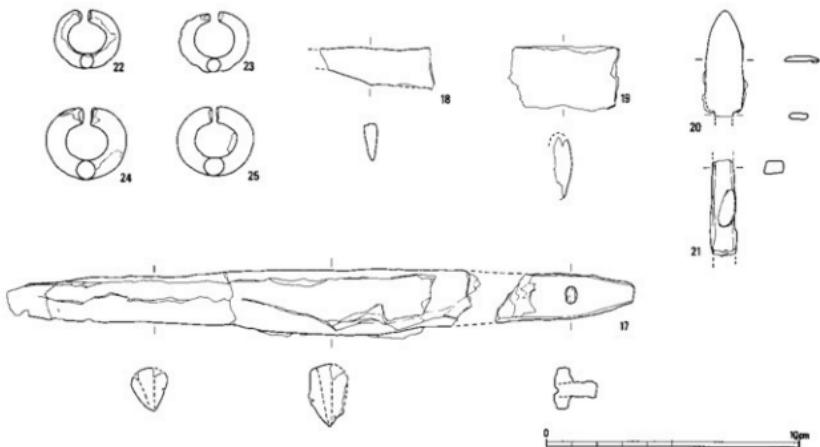
ロクロ土師器皿（31） 2号墳石室跡の擾乱土上面



第17図 出土遺物実測図〔1号墳出土土器〕(1:4)



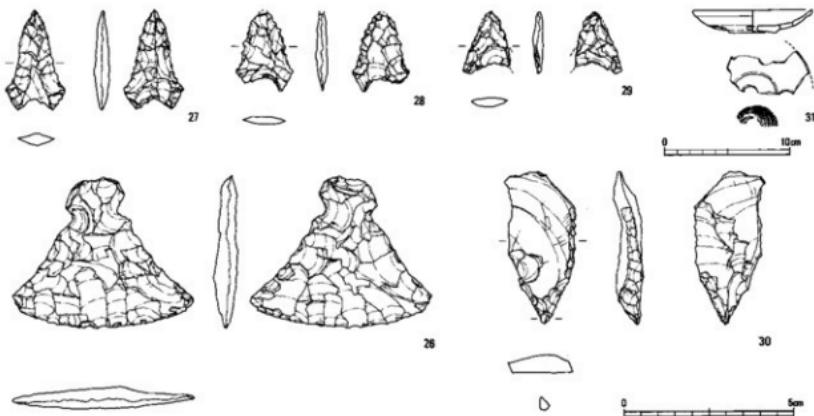
第18図 出土遺物実測図〔2号墳出土土器〕(1:4)



第19図 出土遺物実測図〔2号墳出土金属製品〕(1:2)

から出土した。口径9.6cm、器高1.8cmで口縁部の内外面および底部内面にロクロナデを施し、口縁部は緩やかに内弯する。口縁端部は上方へつまみ出し、外面に面を有す。高台は径3.6cm、高さ0.2cmで、底部に糸切り痕が認められる。底部中央部及び口縁下

部に、内面から外面方向に向かって穿たれた焼成前穿孔が計4カ所遺存し、おそらく底部中央に1カ所、口縁下部に5カ所の計6カ所の穿孔があったものと思われる。時期およびその用途は不明。



第20図 出土遺物実測図【その他】(26~30は2:3、31は1:4)

4 結 語

(1) 1号墳について

確認はできなかったが、埋葬施設は木棺直葬であったと思われる古墳である。周溝北部の一地点(g5地区)からは須恵器杯片・須恵器壺片が集中して出土した。特に須恵器杯に関しては、出土時にはほとんどが約2~3cmの細片であったが、それらの細片から杯蓋(3~5)や杯身(6~8)が3/4~ほぼ完形になるよう接合することができた。このことから、これらの杯が周溝内に意図的に破碎された状況で置かれた可能性も考えられる。多くの例から、古墳の中での棺の位置を封鎖する位置に、須恵器杯を伴う破碎された須恵器壺での墳丘外祭祀が指摘されており⁹、1号墳の場合も同趣旨の祭祀に関係するものとも考えられるが、1号墳では須恵器壺だけではなく、須恵器杯も破碎されたことになる。仮にこの出土遺物が何らかの祭祀に関連するものであれば、1号墳の墳丘と比自岐盆地の位置関係を意識したものか

もしれない。

また墳丘盛土(第13図15層)中からは、倒立した状態の土師器短頸壺(1)と、そのやや南よりの下部から、正立した状態の須恵器壺(2)が出土した(第21図)。これらの出土遺物は、埋葬施設や、または奥小波田2号墳で確認された埋葬施設下層の土坑などの遺構に伴うものとも考え、平面での検出や土層観察から、遺構あるいは棺の痕跡等の確認を試みたが、そのようなものを確認できなかった。あるいは、これらの中の出土遺物は墳丘築造時に何らかの理由で埋設されたものなのだろうか。ただし、担当者の力量不足により間違った遺構を見落とした可能性も否定しない。

(2) 2号墳について

石材の抜き取り痕から、2号墳の埋葬施設は袖部が右に張り出す片袖式の横穴式石室で、T K209~T K217期の遺物が出土する。

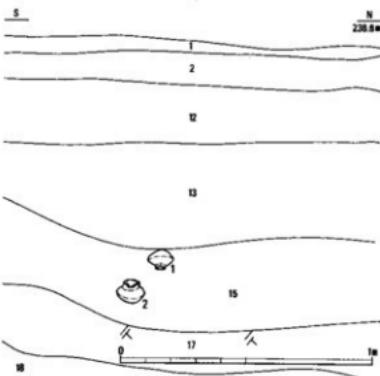
伊賀地方でも多くの石室が確認されているが、鷺ヶ尾2号墳の石室に平面形と規模が近似すると思われるものには、名張市尻矢4号墳（右片袖、遺存全長6.1m、玄室長3.3m、奥壁幅1.5m、袖張り出し部0.5m、玄室遺存高2.0m⁹）や青山町勝地大坪1号墳（右片袖、遺存全長8.3m、玄室長3.3m、玄室幅1.5～1.7m、袖張り出し部0.45m、玄室遺存高1.5m¹⁰）などをあげることができる。また、玄室の規模のみで比較するならば、名張市上山7号墳（両袖、玄室長3.2m、奥壁幅1.6m、玄室遺存高2.2m）、同8号墳（両袖、玄室長3.5m、奥壁幅1.5m、玄室遺存高2.3m）、同14号墳（両袖、玄室長3.2m、奥壁幅1.6m、玄室遺存高2.1m）、名張市小谷1号墳（両袖、玄室長2.94m、玄室幅1.26m、玄室遺存高1.48m¹¹）などが近似するものとしてあげられる。玄室の天井石まで遺存するものはないが、これらの平面規模を有する伊賀地方の玄室が、築造当初は概ね2.0m以上の高さを有したものと考えられる。鷺ヶ尾2号墳石室跡では、奥壁部分の石材抜き取り痕跡検出位置から墳丘遺存部分までの高低差は約1.5mであるので、墳丘頂部は少なくとも0.5m以上削平されたと推定することもできる。

また、鷺ヶ尾2号墳石室に平面形、規模とも近似するとしてあげた、尻矢4号墳は径12mの円墳で6世紀中頃～後半（MT85～TK43期）に築造されたものであり、勝地大坪1号墳は径12mの円墳で6世紀後半（TK43期）に築造された古墳であることは、いずれも鷺ヶ尾2号墳石室の築造時期（TK209～TK217期）より先行するものである。伊賀地方ではTK209期以降に比定される片袖式の横穴式石室は、伊賀北部では大山田村向山2号墳（遺存全長11.4m、玄室長5.2m、奥壁幅2.4m）、同6号墳（遺存全長9.6m、玄室長4.8m、奥壁幅1.52m¹²）、大山田村横枕2号墳（遺存全長8.3m、玄室長5.7m、玄室幅2.0m¹³）、阿山町奥弁天4号墳（遺存長7.4m、玄室長4.4m、奥壁幅1.7m¹⁴）などで、これらの玄室は鷺ヶ尾2号墳のものよりもかなり規模が大きい。これに対して伊賀南部では片袖式のものとして、青山町勝地大坪2号墳（遺存全長7.0m、玄室長4.0m、玄室幅1.3m¹⁵）、名張市ひなご屋敷3号墳（遺存全長6.3m、玄室長2.8m、奥壁幅1.5m¹⁶）や、名張市小谷3号墳（両袖式

の可能性もあり、遺存全長7.2m、玄室長3.32m、奥壁幅1.8m¹⁷）等があるが、これらは鷺ヶ尾2号墳のものと玄室比（玄室の幅と長さの比率）の違いが大きい（鷺ヶ尾2号墳1:2.3、勝地大坪2号墳1:3、ひなご屋敷3号墳1:1.9、小谷3号墳1:1.8）。また、玄室の規模が近似する名張市上山7号墳や同14号墳は両袖式である。このように、鷺ヶ尾古墳群が横穴式石室を導入した時期には、2号墳に近似した規模の玄室を持つ片袖式の横穴式石室は、現時点で伊賀地方では資料を見いだせない。

(3) 伊賀地方の石室と鷺ヶ尾2号墳石室について

伊賀南部地方では、横穴式石室が6世紀初頭には受容され、群墳中の横穴式石室もTK10期に出現する。しかし、鷺ヶ尾古墳群では1号墳築造時期（TK209期）まで木棺直葬墓が採用されていたと考えられるので、横穴式石室の導入が、伊賀南部地方の他地域よりかなり遅れた可能性が高い。このことから、その築造にあたって周辺地域の既にあるもののプランを参考にしたと仮定することもでき、築造時期が先行する尻矢4号墳や勝地大坪1号墳の築造技術等の影響を受けた可能性もある。鷺ヶ尾古墳群が位置する比自岐盆地周辺地区と、勝地大坪古墳群が位置する現青山町勝地地区は、共に律令期の伊賀郡阿我郷に含まれると考えられる。このことから、古墳時代においても両地区の地域的つながりは深かったものと思われ、勝地大坪1号墳に関係する技術等から



第21図 1号墳遺物出土状況図（1:20）

図中の番号は遺物番号及び第13図の土層番号と対応

の影響は大きいとも考えられる。

この観点にたてば、鷺ヶ尾2号墳と勝地大坪1号墳の玄室の平面形が、ともに奥壁部分が左右壁と直交せず、右壁に向かってやや開く台形状であることは興味深い。この玄室の平面形が何らかの意味を持つのかは不明だが、勝地大坪古墳群内では、1号墳に先行する3号墳の玄室も、奥壁が左壁にやや開くように交わる台形である。このように台形を呈する玄室は、6世紀後半代の築造とされる白山町ガガタ2号墳や奈良県橿原町能峰2号墳にも見られ、あるいは大和地方から伊賀南部地域、さらに伊勢地方への横穴式石室の技術等の伝播の一端を示すものかもしれない。

ところで、伊賀南部地域の首長層と関係する美旗古墳群において、その一郭に位置づけられる赤井塚古墳は6世紀後半の築造と考えられているが、同古墳は盟主墳として比較的規模の大きい石室が導入されている。これに対し、同じく伊賀南部地域の首長層と関係する石山古墳や塙塚古墳が築造された比自岐盆地周辺では、資料が乏しく不明な点が多いが、赤井塚古墳に匹敵する石室は現時点では確認されていない。このことは伊賀南部地域の首長層の動向と、何らかの関係があるのだろうか。

(4) 鷺ヶ尾古墳群の築造時期とその変化について

鷺ヶ尾1号墳と2号墳は、南北に延びる尾根筋の頂部に隣接して位置し、その隣接部分の周溝を共有するような状態となっており、墳丘の径や、遺存する墳丘の最頂部の標高がほぼ同じものであることから、外観からはいずれか一方がこの古墳群の盟主墳として意識されて築造されたものとは判断し得ない。

周溝検出の際には2つの古墳の新旧関係は確認できなかった。一方、共有する周溝部分の土層断面観察からは、埋土の上層部に2号墳が1号墳を切るような状況が見られるが、周囲の状況から2基の古墳が築造された後のものと判断する。また、1号墳南東隅の墳丘の変形は、2号墳の周溝掘削の際に生じたものとも思われたが、1号墳の東部の大部分が後世の削平によって著しく変形したと考えるのが妥当だと思われる。結局墳丘の遺存状況や周溝共有部分の土層観察からは、1号墳と2号墳の新旧関係は確定できなかった。

1号墳の出土遺物のうち、須恵器杯（3～9）はT K43～T K209期に相当するに対し、2号墳出土遺物の須恵器杯（12・16）はT K209期に相当し、須恵器杯（11・13～15）はT K217期に相当することや、一般的な古墳造営の状況から考えて、埋葬施設が横穴式石室である2号墳が、埋葬施設が木棺直葬であると思われる1号墳より、先行するとは思われない。

出土遺物からは、1号墳の築造時期をT K209期に比定して問題はないと思われるが、2号墳出土遺物は石室跡の攪乱土中より出土したものであるため、その資料性には不確定要素が大きいうえにT K209期の遺物量は少ない。しかし2号墳に関しては、とりあえず2つことが想定できる。第1に、T K209期に築造され、T K217期に追葬が行われた。第2に、T K217期に築造され、追葬があった場合もあり時間をおかずに行われ、T K209期の遺物は後世の盗掘等の際に混入した。以上の2つである。

第1の状況では、1号墳と2号墳はT K209期のはば同時期に築造されたこととなり、場合によつては、2号墳の墳丘を築造する際、地山を削り出すことによって排出する土を、1号墳の墳丘盛土として使用したとの推測もでき、2つの古墳が同時並行で築造された可能性も考えられる。

第2の状況では、1号墳がT K209期に単独で築造された後、あらためて2号墳がT K217期に築造されたことになる。

1号墳が単独で築造された際には、1号墳・2号墳の土層断面観察等からわかる地山面の傾斜から（第13図）、当初の地形は2号墳部分の位置がこの尾根筋の最標高部分であったと思われる所以、1号墳はあえてこの尾根の最標高部分をさけて築造されたこととなる。このような状況は近畿地方でも見られ、盛土に使用する土を高所から確保するために、墳丘を地形の最標高部分からやや低い場所に築造したと考えられている。この場合1号墳は墳丘に関して、地山削り出しではなく、盛土を成すことを強く意識したものと思われる。

また、1号墳・2号墳が互いの墳丘域を明確に意識している状況がうかがえることから、あるいは1号墳築造の際には、既に2号墳の築造が予定されていたとも考えられる。

いずれにしても 2 基の古墳は、おそらくあまり時間をおかずして築造されたのであろう。

3 号墳は、大局的には 1 号墳・2 号墳の位置する同一尾根筋の標高が低い場所に位置すること、埋葬施設は南に開口する横穴式石室の可能性が高いことなどから、3 号墳は 1 号墳・2 号墳よりも後出するものと思われる。

以上から鷲ヶ尾古墳群は 1 号墳 → 2 号墳 → 3 号墳の順で築造されたと考えられる。ただし、1 号墳と 2 号墳は同時並行で築造された可能性も否定できない。また、2 号墳と 3 号墳の間の尾根筋上にもかつて古墳が存在したこととも考えられたが、現況の踏査では確認できなかった。

このように鷲ヶ尾古墳群では、1 号墳が盛土を主体とする墳丘に埋葬施設が木棺直葬と思われる古墳であるのに対し、2 号墳は大部分が地山削り出しによる墳丘に埋葬施設が横穴式石室の古墳である。この性格の異なる 2 つの古墳があまり時期差なく（場合によっては同時に）、周溝を共有した状況で築造されたことは、この時期に同古墳群内で墓制に大きな変化があったと見ることができる。この様な変化の要因としては、同一被葬集團が異なった墓制を受容した結果生じたと思われるものや、ある地域に異なった墓制を持つ集團が移住してきた結果生じたものなどが考えられる。鷲ヶ尾古墳群内では、1 号墳と 2 号墳が周溝を共有する点などその位置的状況から、同一被葬集團内で異なった墓制を新しく導入した結果

[注]

- ① 亀田 博「後期古墳に埋葬された土器」『考古学研究』第 23巻 第 24 号 考古学研究会 1977
- ② 竹内美昭「No.86 地点の調査(奥小波田 A 運跡)」『上野市新都市開発整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告書 第 4 分冊』 上野市遺跡調査会 1994
- ③ 門田了三「尻矢古墳群」 名張市遺跡調査会 1995
- ④ 吉沢 良「勝地大坪遺跡・勝地大坪古墳群」『平成 3 年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告 第 1 分冊』 三重県埋蔵文化財センター 1992
- ⑤ 門田了三「男山古墳群 上山古墳群」名張市遺跡調査会 1980
- ⑥ 水口昌也「鴻之巣遺跡・小谷遺跡・小谷古墳群」名張市遺跡調査会 1991
- ⑦ 註③に同じ
- ⑧ 註④に同じ
- ⑨ 上村安生「向山 2・6 号墳発掘調査報告」 三重県教育委員会 1987
- ⑩ 中島英夫「横穴 1 号墳・2 号墳」『昭和 54 年度県営團地整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 三重県教育委員会 1980

果、変化が生じたものと思われる。

いずれにしても、鷲ヶ尾古墳群内では T K209～T K217 期に埋葬施設が木棺直葬から横穴式石室へ移行されたと考えられ、おそらく比古岐盆地を中心とする地域では T K209～T K217 期に古墳の埋葬施設として、横穴式石室が受容されていったのであろう。

(5) その他

縄文時代前期と思われる石器の出土は、鷲ヶ尾古墳群の位置する丘陵が縄文時代の人々の活動範囲であったことが確認できた。

また、2 号墳石室跡擾乱土上面より出土した焼成前穿孔が認められるロクロ土師器皿(31)は、現時点では類似品を見いだせず、1 点のみの出土であり供伴遺物も皆無に等しいため、その時期や用途などは不明である。中世以降穿孔された土師器皿の用途としては、何らかの祭祀に使用されたとも考えられるが、いずれも焼成後穿孔のものであることなどから、燐台としての実用具との研究もある。しかし今回出土の土師器皿が焼成前穿孔であることは、実用具としての性格は乏しいと思われる。また古墳が後世の時代に地元の祭祀の場所として意識された例もあり、鷲ヶ尾古墳群でも 3 号墳が位置する尾根筋の西端に、近世以降の墓地が今も現存することは、鷲ヶ尾古墳群が位置する尾根筋全体が近年まで墓域などとして意識されていたとも考えられる。以上の点から、この土師器皿が何らかの祭祀に関連した可能性も否定できない。(筒井正明)

⑪ 国本武和はか「奥弁天 4 号墳・源六谷 1 号墳」 阿山市教育委員会 1988

⑫ 註⑪に同じ

⑬ 水口昌也はか「ひなご屋敷 3 号墳」「名張市遺跡調査概要」名張市教育委員会 1980

⑭ 註⑮に同じ

⑮ 註⑯に同じ

⑯ 註⑰に同じ

⑰ 小玉道明はか「三重県一志郡 カガツタ古墳群発掘調査報告」「研究紀要」第 5 号 三重県埋蔵文化財センター 1996

⑱ 横元哲夫「宇陀の古墳文化」横元哲夫追悼著作刊行会 1996

⑲ 竹内美昭「三重県の横穴式石室研究」「研究紀要」第 4 号 三重県埋蔵文化財センター 1995

⑳ 註⑲に同じ

㉑ 兼康保明「考古学推論」大巧社 1996

遺物番号	器種	出土位置	計測値 (cm)	(残存度)	形態・技術・調製の特徴等	色調	地土
1 003-02	土師器 縦張型	f 6 1号墳頂丘	口縁部径 : 3.7 器高 : 6.6 最大径 : 9.4 底形状 : 3.8	(3/4) (完存)	口縁部ヨコナラ。外側風化著しい。口縁部内外面、体部上部スス付着	SYR7/4に近い橙 10YR6/3淡黄橙	細砂粒含
2 003-01	須恵器 蓋	f 6 1号墳頂丘	口縁部径 : 6.7 器高 : 9.9 最大径 : 10.8 底形状 : 6.0	(1/2) (完存)	口縁部圓転ナダ。体部外圍上部カキ目。体部外圍下部凹輪ナダ。底部外圍圓転ヘラケズリ。	N5/灰 N4/灰	細砂粒含
3 002-02	須恵器 杯蓋	g 5 1号墳頂丘	口縁部径 : 14.6 器高 : 4.1	(3/4)	内外面圓転ナダ。天井部外圍圓転ヘラケズリ。	N7/灰白	細砂粒含
4 002-03	須恵器 杯蓋	g 5 1号墳頂丘	口縁部径 : 15.2 器高 : 3.2	(1/5)	内外面圓転ナダ。天井部外圍圓転ヘラケズリ。	N7/0灰白	細砂粒含
5 002-01	須恵器 杯蓋	g 5 1号墳頂丘	口縁部径 : 15.0 器高 : 4.4	(4/5)	内外面圓転ナダ。天井部外圍圓転ヘラケズリ。	N7/0灰白	細砂粒含
6 002-07	須恵器 杯身	g 5 1号墳頂丘	口縫部径 : 13.1 受納部径 : 15.4 器高 : 3.65	(1/2) (3/4)	内外面圓転ナダ。天井部外圍圓転ヘラケズリ。	N7/0灰白	細砂粒含
7 002-06	須恵器 杯身	g 5 1号墳頂丘	口縫部径 : 12.8 受納部径 : 15.1 器高 : 4.15	(3/4) (5/6)	内外面圓転ナダ。天井部外圍圓転ヘラケズリ。	N7/0灰白	細砂粒含
8 002-05	須恵器 杯身	g 5 1号墳頂丘	口縫部径 : 12.8 受納部径 : 15.2 器高 : 4.7	(5/6) (ほぼ完存)	内外面圓転ナダ。天井部外圍圓転ヘラケズリ。	N7/0灰白	細砂粒含
9 002-04	須恵器 杯身	g 5 1号墳頂丘	口縫部径 : 12.0 受納部径 : 14.2	(3/8)	内外面圓転ナダ。天井部外圍圓転ヘラケズリ。	7.SYR7/4に近い橙	細砂粒含
10 003-03	須恵器 執	f 10 2号墳石室跡	口縫部径 : 8.7~11.8 器高 : 4.2~5.2	(完存)	内外面圓転ナダ。底部外圍圓転ナダ後ナダ。委み大。体部に孔隙2条有り。	N7/灰白	細砂粒含
11 004-03	須恵器 杯蓋	e 10 2号墳石室跡	口縫部径 : 12.2	(1/2)	内外面 圓転ナダ	N7/灰白	細砂粒含
12 004-03	須恵器 杯蓋	e 10 2号墳石室跡	口縫部径 : 10.9	(1/5)	内外面 圓転ナダ。天井部外圍圓転ヘラケズリ。	N8/灰白 N7/灰白	細砂粒含
13 004-04	須恵器 杯身	e 10 2号墳石室跡	口縫部径 : 13.8	(3/1)	内外面 圓転ナダ	N7/灰白 N8/灰白	細砂粒含
14 004-01	須恵器 杯身	e 10 2号墳石室跡	口縫部径 : 11.8 受納部径 : 13.4 器高 : 3.8	(2/3)	内外面圓転ナダ。底部外圍ヘラキリ未調整。	N7/灰白 N8/灰	細砂粒含
15 003-05	須恵器 杯身	e 10 2号墳石室跡	口縫部径 : 10.8 受納部径 : 13.0 器高 : 4.0	(2/5)	内外面圓転ナダ。底部外圍圓転ナダ後ナダ。	N7/灰白 N6/灰	細砂粒含
16 003-04	須恵器 杯身	e 10 2号墳石室跡	口縫部径 : 13.3 受納部径 : 15.4 器高 : 4.5	(1/8) (1/3)	内外面圓転ナダ。底部外圍圓転ヘラケズリ。	N6/灰	細砂粒含
17 001-01	鍔器 小刀	f 10 2号墳石室跡	刀身部先端在長 : 18.5 鍔残存長 : 5.4		鍔造。		
18 001-02	鍔器 小刀	f 10 2号墳石室跡	刀身先端部残存長 : 4.6				
19 001-03	鍔器 小刀	e 10 2号墳石室跡	刀身部残存長 : 2.1				
20 001-04	鍔器 鐵劍	f 10 2号墳石室跡	鍔部長 : 4.1				
21 001-06	鍔器 鐵劍	f 10 2号墳石室跡	基部残存長 : 3.6				
22 001-09	金葉製品 瓦瀬	f 10 2号墳石室跡	径 : 2.3~2.6 重さ : 7.0g	(完存)	鋼芯金葉。金箔0/1枚。		
23 001-06	金葉製品 瓦瀬	f 10 2号墳石室跡	径 : 2.3~2.6 重さ : 8.2g	(変化大)	鋼芯金葉。金箔微量残。		
24 001-07	金葉製品 瓦瀬	f 10 2号墳石室跡	径 : 2.8~3.2 重さ : 19.8g	(完存)	鋼芯金葉。金箔微量残。		
25 001-06	金葉製品 瓦瀬	e 10 2号墳石室跡	径 : 2.7~3.0 重さ : 19.2g	(完存)	鋼芯金葉。金箔0/10枚。		
26 006-02	石器 石器	g 5 1号墳頂丘	残存長 : 4.45 幅 : 5.31 厚さ : 0.65 重さ : 9.54 g		サヌカイト製		
27 006-01	石器 石器	f 5 1号墳頂丘	残存長 : 2.9 幅 : 1.75 厚さ : 0.42 重さ : 1.06 g		サヌカイト製		
28 005-02	石器 石器	e 6 1号墳頂丘	残存長 : 2.29 幅 : 1.65 厚さ : 0.27 重さ : g		サヌカイト製		
29 005-01	石器 石器	g 5 1号墳頂丘	残存長 : 1.81 幅 : 1.32 厚さ : 0.29 重さ : g		サヌカイト製		
30 007-01	石器 石器	g 7 1号墳頂丘	残存長 : 4.51 幅 : 2.0 厚さ : 0.65 重さ : 6.25 g		サヌカイト製		
31 004-05	四足馬鹿器 玉	e 10 2号墳頂丘	口縫部径 : 9.8 器高 : 1.8 底部径 : 3.6	(1/3) (1/4)	内外面ヨコナラ。底部外圍系切痕有。残存部に擦痕有 穿孔 4カ所有。	SY8/1灰白	細砂粒含

第2表 出土遺物観察表

図版 4



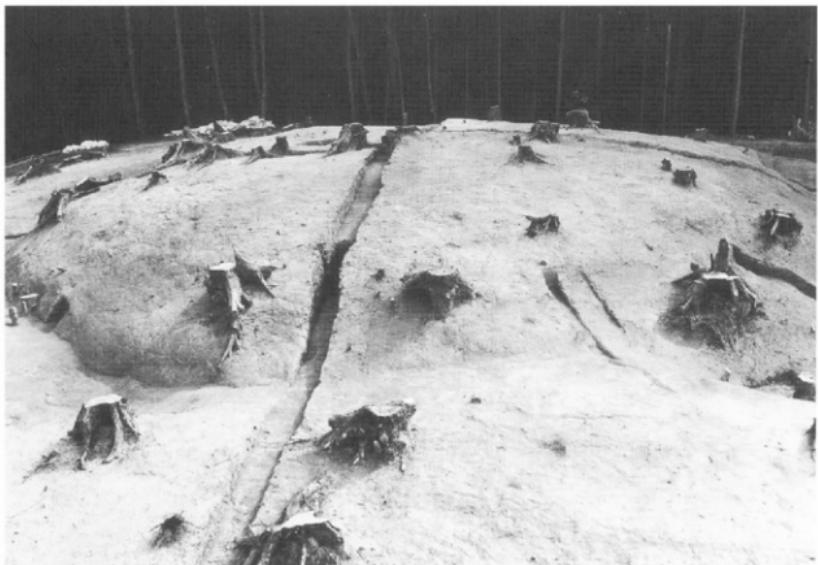
1号墳調査前（北から）



2号墳調査前（北から）



1号墳調査後（北から）



1号墳調査後（西から）

図版 6



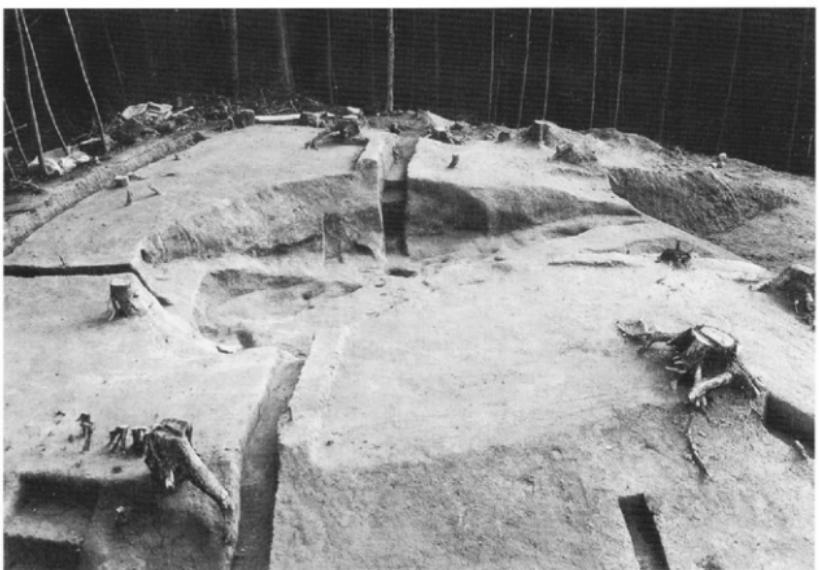
2号墳調査後（西から）



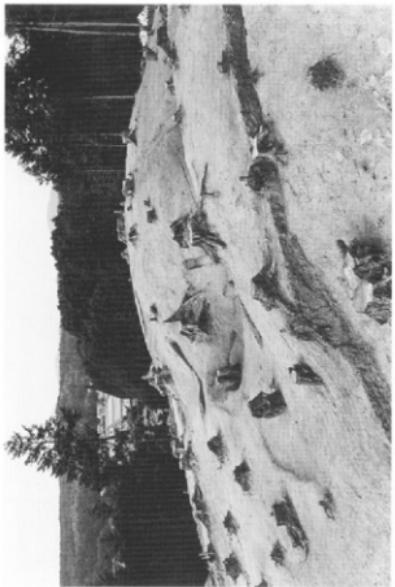
2号墳調査後（北から）



2号墳石室跡（南西から）



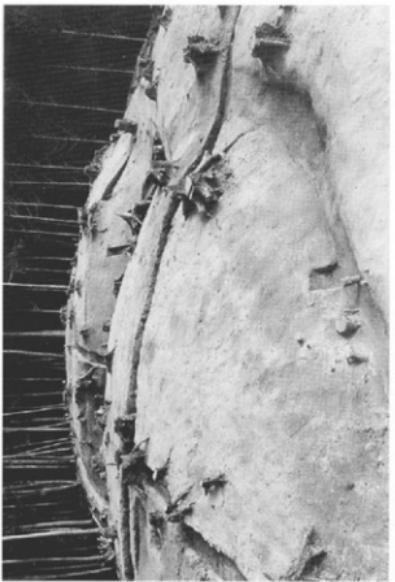
2号墳石室跡（北から）



1号墳・2号墳〔手前〕・2号墳〔南から〕



3号墳現況〔北から〕



1号墳〔手前〕・2号墳〔北から〕



3号墳現況〔東から〕



1号墳〔左〕・2号墳間周溝（西から）



1号墳・2号墳間周溝土層（東から）



1号墳遺物出土状況



1号墳遺物出土状況



2号墳石室跡検出状況（東から）



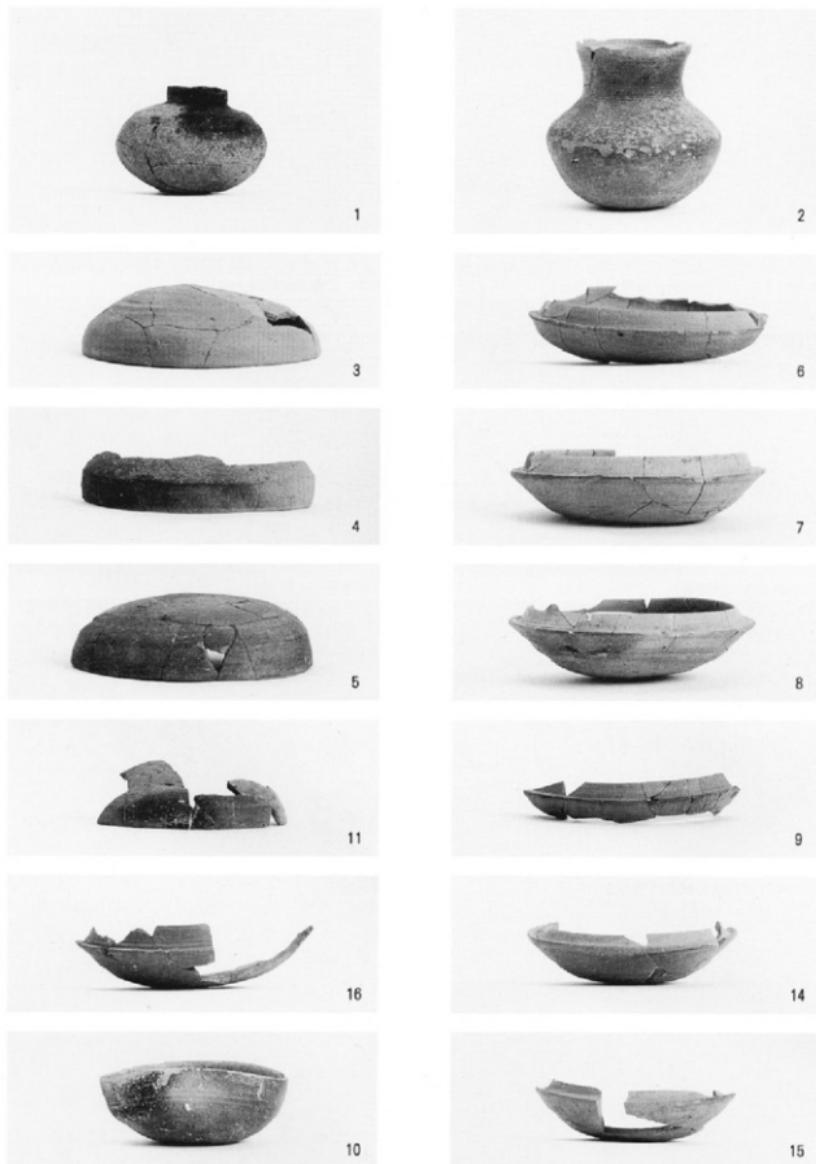
体験発掘



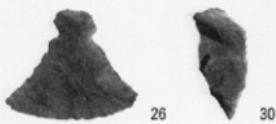
調査区より比自岐盆地を望む（南から）



調査区より比自岐盆地を望む（東から）



出土土器（1～9は1号墳出土、他は2号墳出土）



出土石器



31

報告書抄録

ふりがな	じょのこしいせき わしがおこふんぐん はくつちょうさほうこく						
書名	城之越遺跡 驚ヶ尾古墳群 発掘調査報告						
副書名							
卷次							
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	146-10						
編著者氏名	木野本和之・筒井正明						
編集機関	三重県埋蔵文化財センター						
所在地	〒515-03 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 05965(2)1732						
発行年月日	西暦 1997年 3月 31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 胡	北緯 度	東經 度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
じょのこしいせき 城之越遺跡	うえののしきどあざじょのこし 上野市比土字城之越	206	1130	34°40'32"	136°10'00"	1996.08.19 ~10.11	600m ² 農林漁業用排水 油税財源整備 道整備事業
かしがおこふんぐん 驚ヶ尾古墳群	うえののしきどあざじょのこし 上野市鷹見字驚ヶ尾	206		34°42'09"	136°11'55"	1996.07.22 ~10.31	1,000m ² 広域農地農 道整備事業（伊 賀3期地区）
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
城之越遺跡	史跡	古墳時代	土坑	土師器・須恵器			
驚ヶ尾古墳群	古墳	古墳時代	横穴式石室跡	土師器・須恵器・鉄製品・耳環			

平成9(1997)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年7月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 146-10

城之越遺跡 驚ヶ尾古墳群 発掘調査報告

—三重県上野市比土・摺見—

1997年3月

編集発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 光出版印刷株式会社
